



# INFOS

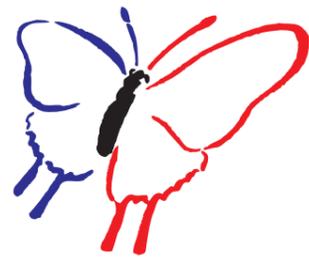
日仏整形外科学会広報誌 **アンフォ**

- |                                                      |                                               |                                                     |
|------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| ■会長……………金子和夫<br>Président ——— K. KANEKO              | ■副会長……………大橋弘嗣<br>Vice-Président ——— H. OHASHI | ■書記長……………藤原憲太<br>Secrétaire général ——— K. FUJIWARA |
| ■書記・会計……………青木 清<br>Secrétaire et Trésorier — K. AOKI |                                               |                                                     |
| ■幹事……………安永裕司<br>Membre exécutif — Y. YASUNAGA        | 久保俊一<br>T. KUBO                               | 本間康弘<br>Y. HONMA                                    |
| ■名誉会員……………小野村敏信<br>Membre d'honneur — T. ONOMURA     | 小林 晶<br>A. KOBAYASHI                          | 坂巻豊教<br>T. SAKAMAKI                                 |
|                                                      |                                               | 飯田 哲<br>S. IIDA                                     |
|                                                      |                                               | 田中康仁<br>Y. TANAKA                                   |
|                                                      |                                               | 星 忠行<br>T. HOSHI                                    |
|                                                      |                                               | ■顧問……………瀬本喜啓<br>Conseiller ——— Y. SEMOTO            |

■事務局：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院内（係：大橋弘嗣）  
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339  
Bureau : Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON

■発行所：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院（編集者：大橋弘嗣）  
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339  
Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON (Éditeur : H. OHASHI)

■ホームページアドレス：http://www.sofjo.gr.jp



2019.3.31  
VOL. 29

# INFOS冒頭のご挨拶

順天堂大学整形外科 金子 和夫

このINFOS誌が皆様のお手許に届く頃には、平成も残り僅かのことでしょう。SOFJOは1987年11月に滋賀医科大学初代教授の七川敏二先生を会長として、第一回会合が神戸で開かれました。昭和での唯一の集会となり、その2ヶ月後に元号が変わり、SOFJOは平成と共に大きく進展してきました。昨年7月には平成最後の第18回会合を、同じく滋賀医科大学整形外科の今井晋二教授が会長として“温故知新”をテーマに琵琶湖ホテルで主催されました(図1)。

七川教授が神戸、東京、大阪、京都と場所を変えて第7回まで会長を担当された後、滋賀医科大学による

31年ぶりの開催でしたが、同医局からは今まで多くの先生方が日仏交換研修に参加されています。留学年順に、1992年に現在滋賀県スポーツ医会の会長の村上元庸先生(1992年)、石澤命仁非常勤講師(1995)、川崎拓准教授(1994)、菊地克久講師(2007)、奥村法昭助教(2010)、児玉成人准教授(2014)の6名の先生方です。同時にフランスからの受け入れにも積極的で、Philippe RENAUX(1994)、Olivier CHARROIS(1999)、Eric HAVET(1999)各先生が研修されています。

昨年の学会については今井晋二教授からご報告いただきますが、充実した内容もさることながら、悪天候

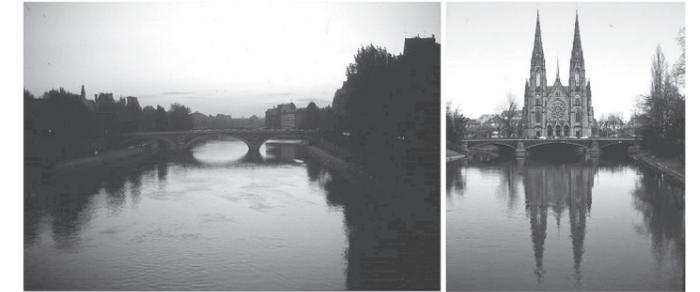


●図1 第18回日仏整形外科学会 ポスター-SOFCOT

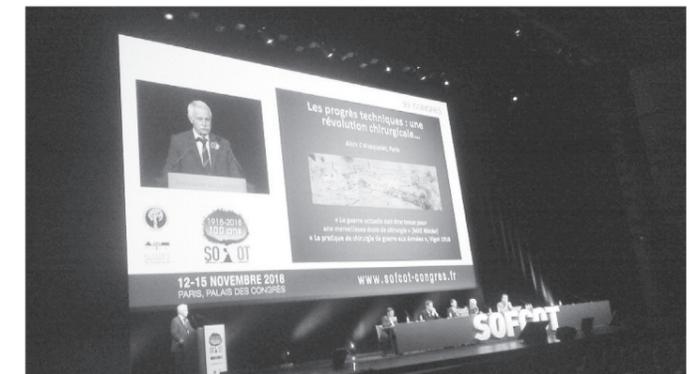
## 日程表

講演会場 (琵琶湖ホテル 3F 塩硝west)		ポスター会場 (琵琶湖ホテル 3F 塩硝central)		
8:00	8:20 開会式 8:25~8:55 開会報告 座長:青木 洋, 本間 康弘			
9:00	9:00~9:35 一般演題 「足・膝」 座長:二井 肇			
10:00	9:40~10:15 一般演題 「肩・上肢」 座長:森原 肇			
11:00	10:20~11:20 教育研修講演 1 演者:大島 雅弘, Louis-Arthur COLLET 座長:松野 裕郎	ポスター-1 11:30~12:00 「膝」 座長:大島 雅弘	ポスター-2 11:30~12:00 「THA」 座長:大島 雅弘	ポスター-3 11:30~12:00 「脊髄」 座長:大島 雅弘
12:00	12:00~12:30 ポスター-発表 「肩・上肢」 座長:村上 元庸	12:00~12:30 ポスター-発表 「足・膝」 座長:村上 元庸	12:00~12:30 ポスター-発表 「脊髄」 座長:村上 元庸	12:00~12:30 ポスター-発表 「THA」 座長:村上 元庸
13:00	12:40~13:40 教育研修講演 2 演者:石橋 恭之, Michel P. Bonnin 座長:安家 裕司			
14:00	13:50~14:50 教育研修講演 3 演者:Philippe A. Liembaux, Michel P. Bonnin 座長:田中 千雄			
15:00	15:00~15:35 一般演題 「脊髄」 座長:堀尾 昌志			
16:00	15:40~16:25 一般演題 「股関節」 座長:藤田 寛和			
17:00	16:30~17:30 特別講演 演者:Philippe Hernigou, 小林 昌 座長:金子 和夫			
18:00	17:30 閉会式			

●図2 第18回日仏整形外科学会学術集会 日程表ポスター



●図3 第15回日仏整形外科合同会議  
2019年9月13日(金)・14日(土)にSTRASBOURGで開催予定



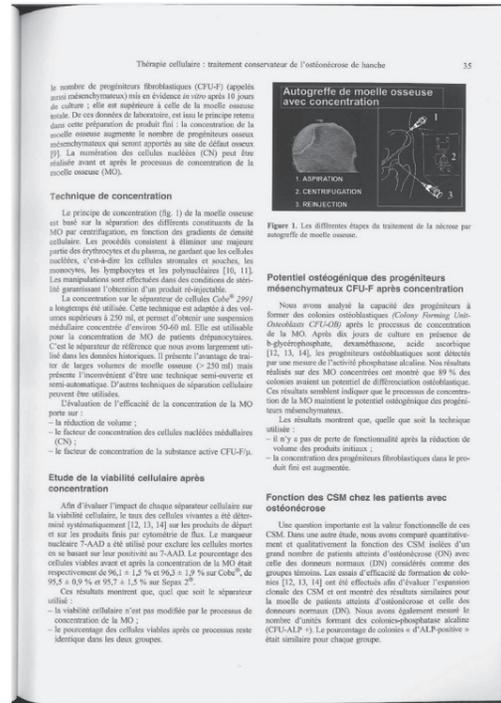
●図4 SOFCOT 100年記念講演 Alain MASQUELET



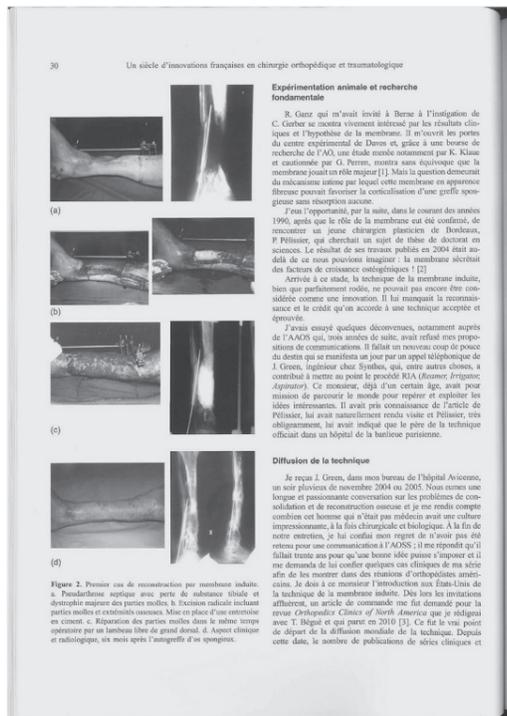
●図5 SOFCOT100年記念学会の後にパリにて、HERNIGOU夫妻と本間幹事(左)、研修するドクターを囲んで(右)



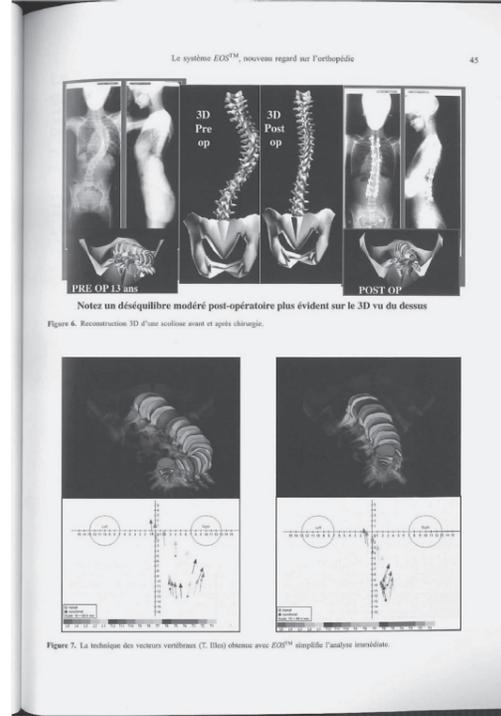
● 図6



● 図8



● 図7



● 図9

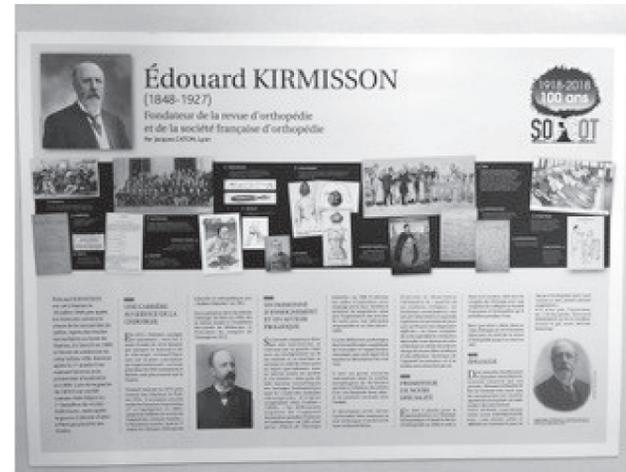
にも拘わらず琵琶湖や比叡山などを満喫することが出来た、素晴らしい集会でした(図2)。同大学病院院長の松末吉隆先生に、快く学会開催をお受けいただきましたことを、ここに改めて御礼申し上げます。

本年2019年のAFJOは、フランス北東部のストラスブールで9月13日(金)・14日(土)に催されます。昨年11月のパリでのAFJO運営委員会には、会長のLuc KERBOULL先生とPhilippe HERNIGOU教授、Jacques CATON先生、Arain DURANDEAU先生にご参加いただき、パネルディスカッションは“THA脱臼の諸問題と対策(仮題)”や“前十字靭帯損傷治療における日仏の差異(仮題)”に決まりました。詳細や演題募集については、ホームページをご覧ください。

STRASBOURG は9月が最もお勧め、とフランス側からコメントがありました。どうぞ奮ってご参加ください。皆様とストラスブールでお会いするのを楽しみにしております。(図3：留学時代の1987年にGROSS-KEMPFセミナーにて撮影)

次にSOFOT(フランス整形災害外科学会)についてですが、昨年は1918年の創設から100周年の記念大会でした(図4, 5：Alain MASQUELET先生の100年記念講演)。記念誌を編集者の一人であるJacques CATON先生からいただいたので、一部をご覧ください(図6-10)。

では、引き続き新元号においての会員の皆様のご健勝と、SOFJO・AFJOの発展をお祈り申し上げます。



● 図10

## 第18回日仏整形外科学会を開催して

# 「第18回日仏整形外科学会を振り返り —温故知新と災い—」

滋賀医科大学整形外科 教授 今井 晋 二

昨年は第18回日仏整形外科学会を琵琶湖ホテルで開催させていただき栄誉を得ました。学会のテーマは「温故知新」です。先人の知識を懐かしみつつ、若い人たちに教育と経験の場を提供したいとの願いでした。そして、初代七川歓次教授が設立に大きく貢献された日仏整形外科学会を 滋賀の地で開催させていただくこと

はこの上ない誉れである事を若い医局員たちにも知ってもらいたいとの願いです。

フランスからは、4名の教授先生をお招きし、国内からも5名の教授先生を招待して、医局員総出で準備をしておりました。ところが7月7日の当日は、後になって「西日本豪雨災害」と名付けられるほどの大

雨の日になってしまいました。昨年を振り返ってみますと なんと大きな災害が多かった年であろうかと思いだされます。大阪や北海道の地震、そして関空が水没した9月の台風など昨年の一年の言葉は災害を意味する「災」だったのも象徴的です。

北は弘前大学の石橋先生、千葉大学の大鳥教授、福井大学の松峯教授、長崎大学の尾崎教授、そして順天堂大学の金子理事長に来ていただくことになっていま

したが、当日の大雨でどの飛行機も新幹線も「到達できないかもしれないので申し訳ないが今、しばらく待ってくれ」との連絡が続きました。会長招宴の時間になってみますと日本の招待の先生方は全て、いらっしゃっていて 少なくともこれで会が成立すると安堵しておりましたが フランス人の先生方がなかなか来られません。ストラスブルグのリベルノ教授、リヨンのボナン教授、アミアンのコレ教授は 関空から タ



クシーで数時間かかかっての到着となりました。

最後に前フランス整形外科学会長のエルニグ先生がビアンカの出航直前でもお見えになっておられませんでした。ビアンカを出航させずに会長招宴を開始し、接岸したままエルニグ先生をお待ちするという奇策まで考えておりましたが、ギリギリ間に合い、全員の招待客を乗せて琵琶湖に出港しました。このように前日から当日の開催までいろいろ危ぶまれた日仏整形外科学会でしたが、医局員・同門会員のご協力と関連病院・企業等からのご寄付のお蔭で成功裏に収めることができました。これも皆様の御礼と厚く御礼申し上げます。

催し物で思い出されるのは我が医局員によるディレイドユニオンズの活躍でした。どの大学の先生方にお話ししても医局でそのようなバンドが持てるのをとても羨ましがられます。そして、今回の第18回日仏整形外科学会でのディレイドユニオンズの先生方の活躍に厚く御礼申し上げます。

昨年の「災い」は天災だけではなくありません。マスコミではパワーハラスメント、特にスポーツ界でのパワーハラ、モラハラが取り沙汰されました。ボクシング協会の会長が強い権力で無理やり試合を誘導したとか、相撲の力士が指導という名のもとに殴られたとか色々なパワーハラ、モラハラがありました。普通に指導しているつもりが、弱い者いじめになってしまっていないか？と自問させられる機会がとても多かった一年でした。

ベテランの整形外科医も全てをマスターしているわけではありません。自分たちの知識が古くなってしまったにも拘わらず、「昔はこうだ」的な教え方は反感を買ってしまいます。ベテランが真に寄与できるのはその新しい知識を勉強する機会を均等に与えることぐらいではないでしょうか。ベテランの方が知識が古くなってしまったことを隠そうとしたり、自分たちが大変だったと見下したり、指導のベクトルは簡単に若手の志向と真逆の方を向いてしまう事を戒めなければなりません。今回の第18回日仏整形外科学会で先生方がお示しになった新しい考え方や知識はどれも「キラキラ」していて、「昔はこうだ」的な教え方は全くありませんでした。

整形外科医の養成に10年、15年かかるのは当たり前です。「まだまだ若い者には負けないぞ」ほど簡単ではありません。今の新人が現在、勉強している内容に今のベテランが15年後でも追いついていけるわけがありません。古き良き同窓と恩師を懐かしみつつ、若い人たちに教育と経験の場を提供できるように、第18回日仏整形外科学会でご指導をいただきました金子和夫理事長、日仏整形外科学会の諸先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。

最後に、第18回日仏整形外科学会の開催にご指導をいただきました金子和夫理事長、日仏整形外科学会の諸先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。



《会場・講演会場(琵琶湖ホテル3F 瑠璃west)》

帰朝報告

座長：青木 清・本間康弘

2015年度日仏整形外科学会交換研修帰朝報告—Annecyの肩関節外科—  
木田圭重 (京都府立医科大学運動器再生外科学教室整形外科)

C'est la vie!!

菊池克彦 (北九州市立医療センター整形外科 (留学時 千早病院))

フランス短期留学紀

岩田浩志 (あいち小児保健医療総合センター整形外科)

帰朝報告(2017年度日仏整形外科学会交換研修)

岡本純典 (大阪医科大学整形外科)

手関節鏡から覗いたフランス手の外科

蒲生和重 (バルランド総合病院整形外科)

一般演題 (足・膝)

座長：二見 徹

変形を有する先天性内反足は、なぜそうなり、どうなっていくのか？

田村太資 (大阪母子医療センターリハビリテーション科)

女性バレエダンサーの足部変形調査

木澤桃子、嶋 洋明、安田稔人、辻中聖也、東迎高聖、根尾昌志 (大阪医科大学整形外科)

足関節外側不安定性に対する鏡視下靭帯再建術の治療成績

小田切陽樹 (保田窪整形外科病院 熊本足の外科センター)

Guילו Stephane (クリニックドゥスポーツ)

高校女子バスケットボール選手における非接触型膝前十字靭帯損傷の危険因子

下崎研吾、中瀬順介、高田泰史、浅井一希、土屋弘行 (金沢大学附属病院整形外科)

島 洋祐 (KKR北陸病院整形外科)

北岡克彦 (光仁会木島病院整形外科)

Osgood-Schlatter病に対する超音波ガイド下注射の効果と安全性の検討

浅井一希、中瀬順介、下崎研吾、土屋弘行 (金沢大学大学院整形外科)

一般演題 (肩・上肢)

座長：森原 徹

糖尿病を合併した腱板断裂例の検討

岩下 哲、大久保敦、米田 稔、高井信朗 (日本医科大学付属病院整形外科)

橋口 宏 (日本医科大学千葉北総病院整形外科)

一次修復不能腱板広範囲断裂に対する広背筋移行術の経験

中島 亮 (JCHO滋賀病院整形外科)

永井宏和 (蘇生会総合病院整形外科)

米田真悟、今井晋二 (滋賀医科大学整形外科)

リバーズ型人工肩関節置換術におけるベースプレート下方傾斜のための関節窩楔状骨移植術の有用性

園木謙太郎、橋口 宏、渡部 寛（日本医科大学千葉北総病院整形外科）  
岩下 哲、米田 稔、高井信朗（日本医科大学整形外科）

尺骨偽関節に対する前骨間動脈を用いた血管柄付き橈骨移植の解剖学的研究

長谷川英雄、清水隆昌、田中康仁（奈良県立医科大学整形外科学教室）  
面川庄平（奈良県立医科大学手の外科講座）  
サンパニック カニット（チェンマイ大学整形外科学教室）  
パサー マハカヌカル（チェンマイ大学解剖学教室）  
齋藤謙一郎（大手前病院整形外科）

CTを用いた有鉤骨鉤の屈筋腱滑車機能および有鉤骨鉤と屈筋腱の位置関係についての考察

後藤賢司、内藤聖人、杉山陽一、木下真由子、金子彩夏、金子和夫（順天堂大学医学部整形外科）  
名倉奈々、岩瀬嘉志（順天堂東京江東高齢者医療センター）  
小畑宏介（山梨県立中央病院）

<b>教育研修講演1</b>	座長：松峯昭彦
----------------	---------

腰椎変性疾患に対するL1/2からL5/S1高位のoblique lateral interbody fusion

大鳥精司（千葉大学大学院医学研究院整形外科）

Current situation of pediatric orthopedics in France—including lower leg deformity and lumbar deformities—

Louis-Michel COLLET（Université de Picardie Jules Verne, France）

<b>教育研修講演2</b>	座長：安永裕司
----------------	---------

日本における膝関節手術の進歩

石橋恭之（弘前大学大学院医学研究科整形外科学講座）

Development and progress of Total Knee Arthroplasty

Michel Pierre Bonnin（Centre Orthopedique Santy, Lyon, France）

<b>教育研修講演3</b>	座長：田中千晶
----------------	---------

The minimally invasive approach for distal radius fractures and malunions

Philippe A Liverneaux（Department of Hand Surgery, Strasbourg University Hospitals）

The latest development of Total Hip Arthroplasty in France

Michel Pierre Bonnin（Centre Orthopedique Santy, Lyon, France）

<b>一般演題（脊椎）</b>	座長：根尾昌志
-----------------	---------

頸椎症性脊髄症の全脊柱矢状面アライメント

吉田 剛、長谷川智彦、大和 雄、坂野友啓、大江 慎、有馬秀幸、三原唯暉、後迫宏樹、戸川大輔、松山幸弘（浜松医科大学整形外科）  
Vital Jean-Marc（ボルドー大学整形外科）

重度思春期特発性側弯症（ $\geq 70^\circ$ ）に対する側弯矯正に影響を及ぼす因子に関する検討

西澤和也（草津総合病院整形外科）  
Gabriel Ka Po Liu、Hee Kit Wong（National University Hospital Spine center）  
森 幹士、今井晋二（滋賀医科大学整形外科）

腰椎後方すべりは姿勢異常に伴う

三原唯暉（浜松医科大学整形外科）

当院における全脊椎CTを用いたびまん性特発性骨増殖症の有病率調査

檜山明彦、渡辺雅彦（東海大学医学部医学科外科学系整形外科学）

一般地域住民を対象とした肩こりと腰痛に関する疫学調査—QOLに与える影響

熊谷玄太郎、和田簡一郎、工藤 整、浅利 享、太田聖也、武田 温、上里涼子、山本祐司、石橋恭之（弘前大学大学院医学研究科整形外科学講座）  
中路重之（弘前大学大学院医学研究科社会医学講座）

<b>一般演題（股関節）</b>	座長：飯田寛和
------------------	---------

DAAでのDual Mobilityカップを用いたTHAはSingle Mobilityカップ使用群と比較し脚長差が増大するか？

石井聖也（東部地域病院整形外科）  
本間康弘、田邊浩規、越智宏徳、幡野佐己依、尾崎 友、渡 泰士、小林英生、馬場智規、金子和夫（順天堂大学病院整形外科）

大腿骨頸部骨折患者に対する人工股関節置換術における3Dポーラスコーティングカップのトルク計を用いたin-vivoでの初期固定力の評価

田邊浩規、本間康弘、小林英生、尾崎 友、越智宏徳、幡野佐己依、渡 泰士、馬場智規、金子和夫（順天堂大学順天堂医院）

寛骨臼形成不全股に対する自家骨移植併用セメントレスTHA

柘原俊久、佐藤昌明、玉置 聡、石田 崇、鈴木 宙、蜂谷将史（国家公務員共済組合連合会 横浜南共済病院人工関節センター）  
中西亮介、神崎浩二（昭和大学藤が丘病院整形外科）

前方進入法を用いた人工股関節全置換術後スポーツ復帰率

二宮太志、老沼和弘、中北吉厚、関口博丈、田巻達也、三浦陽子、東 秀隆、白土英明（船橋整形外科病院人工関節センター）

前方法による人工股関節全置換術の患者立脚型評価

田巻達也、老沼和弘、三浦陽子、東 秀隆、関口博丈、二宮太志、白土英明（船橋整形外科病院）

インプラント周囲感染におけるダプトマイシンの使用経験

おおえ 賢一、植田成実、河村 孟、中村知寿、飯田寛和、齋藤貴徳（関西医科大学整形外科学教室）

<b>特別講演</b>	座長：金子和夫
-------------	---------

JAPAN AND FRENCH ORTHOPAEDIC RELATIONSHIPS during SOFJO and AFJO PERIOD: 30 years of Transmission, Innovation, Interaction with Tradition and Friendship

Philippe Hernigou（Department of Orthopaedic Surgery, University Paris）

日仏整形外科学会の草創期—七川勲次先生へのオマージュ

小林 晶（福岡整形外科病院、日仏整形外科学会名誉会員）

## 《会場・ポスター会場（琵琶湖ホテル3F 瑠璃central）》

### ポスター発表（膝）

座長：大槻周平

#### MRIを用いた高位脛骨骨切り術にともなう関節軟骨の質的变化の検討

阿部里見、松倉圭佑、佐々木祐介、伊藤 浩（旭川医科大学整形外科）

#### 当院で施行した鏡視下膝関節内遊離体摘出術の検討

渡辺 新、絹笠友則、佐藤祐希、山梨裕貴、池田耕太郎（いちほら病院整形外科）

#### 回旋設置不良により膝蓋骨脱臼をきたした人工膝関節置換術の一例

松倉圭佑、阿部里見、佐々木祐介、伊藤 浩（旭川医科大学整形外科学教室）

#### 大腿四頭筋皮下断裂の二例

上中一泰、松村健一、久山陽一郎、城内泰造、藤原 圭（多根総合病院整形外科）

久保充彦、今井晋二（滋賀医科大学整形外科）

#### 上腕骨近位端骨折症例における健側上腕骨頭骨密度の検討

山田光子（藤田保健衛生大学第二教育病院整形外科）

#### 小児に生じた外側二層半月板の一例

荒木 勸（豊郷病院）

久保充彦、藤川ひとみ、熊谷康佑、松末吉隆、今井晋二（滋賀医科大学整形）

#### 再手術を要した大腿骨顆部冠状骨折（Hoffa骨折）の一例

長谷川高秀、森 基、村上啓司、杉本一樹、堀 克弘（京都岡本記念病院整形外科）

今井晋二（滋賀医科大学付属病院整形外科学講座）

### ポスター発表（肩・上肢）

座長：村上元庸

#### 有連続性菲薄化修復腱板に関する術前因子の検討

結城一声、鈴木朱美、佐竹寛史、高木理彰（山形大学整形外科学講座）

村 成幸（吉岡病院整形外科）

#### 腱板状態が上腕骨近位部骨折に対する人工骨頭置換術の治療成績に及ぼす影響

橋口 宏、園木謙太郎、渡部 寛（日本医科大学千葉北総病院整形外科）

岩下 哲、米田 稔、高井信朗（日本医科大学整形外科）

#### 90歳以上のリバーズ型人工肩関節全置換術の短期成績

柴田光史、伊崎輝昌、三宅 智、山本卓明（福岡大学医学部整形外科学教室）

南川智彦、柴田陽三（福岡大学筑紫病院整形外科）

#### Rockwood type V 新鮮肩鎖関節脱臼に対する関節鏡視下烏口鎖骨靭帯・肩鎖靭帯再建術

永井宏和、榎 純一（蘇生会総合病院整形外科）

中島 亮（滋賀医科大学附属病院リハビリテーション科）

今井晋二（滋賀医科大学附属病院整形外科）

#### 上腕骨遠位部T型骨折に上腕動脈損傷を合併した一例

芝田浩平、富田真梨子、佐々木英幸（医療法人徳州会 近江草津徳州会病院）

今井晋二（滋賀医科大学医学部附属病院整形外科学講座）

### ポスター発表（THA）

座長：大橋弘嗣

#### Line-to-lineでサイズ選択したセメントステムの短期成績

高澤 誠（柏厚生総合病院整形外科）

#### 大腿骨頭回転骨切り術後に行ったセメントレスTHAの成績

齊藤正純、上島圭一郎、後藤 毅、石田雅史、藤岡幹浩、久保俊一

（京都府立医科大学大学院運動器機能再生外科学（整形外科））

#### 人工股関節再置換術の長期成績 臼蓋再建様式と生存率について

河井利之、後藤公志、黒田 隆、松田秀一（京都大学病院整形外科）

#### THAアプローチ別による静脈血栓塞栓症発生率の比較検討

福田良嗣、西脇 徹、大矢昭仁、中村 賢、菊池駿介、二木康夫、中村雅也、松本守雄、金治有彦

（慶應義塾大学病院整形外科）

#### 超高分子ポリエチレン摩耗粉によるヒトマクロファージの網羅的遺伝子発現解析によって示される新たな骨溶解メカニズムの解明

アラールテルカウイ、角家 健、高橋大介、岩崎倫政（北海道大学大学院医学研究科整形外科学分野）

#### 人工骨頭置換術における脚長差の調査

益田和明、佐藤克平、横田 治、高見秀一郎（岐北厚生病院整形外科）

### ポスター発表（股関節）

座長：山崎琢磨

#### 臼蓋棚形成術の長期成績

田中秀達、山田則一、大山正瑞、北 純（仙台赤十字病院整形外科）

千葉大介、森 優、桑原功行、馬場一慈、井樋栄二（東北大学大学院整形外科）

藤井玄二（東北股関節疾患センター）

#### 小児の股関節に発生した滑膜性骨軟骨腫症の一例

大石央代、金城 健、我謝猛次、粟國敦男（沖縄県立南部医療センター・こども医療センター整形外科）

#### 診断までに時間を要した腸骨筋膿瘍の一例

金澤臣晃、東山祐介、栃尾秀典、星野雄志、富田一誠（昭和大学江東豊洲病院整形外科）

田邊智絵、佐藤 敦、村上悠人、小原賢司（昭和大学藤が丘病院整形外科）

柁原俊久（横浜南共済病院）

#### 小児大腿骨骨幹部骨折に対し、K-Wireを用いた順行性髄内釘固定を行った一例

笠原俊幸、北川誠大、馬場直人、斎藤英貴、八木圭太郎、森本 茂（近江八幡市立総合医療センター整形外科）

#### 骨軟部肉腫化学療法中における食事摂取量の分析

坂本昭夫、岡本 健、松田秀一（京都大学整形外科）

堀 勇太（小倉医療センター薬剤部）

### ポスター発表（脊椎）

座長：森 幹士

#### 経皮的椎弓根スクリュー刺入時の放射線被ばくの低減とスクリュー刺入の精度向上を目的とした当院での工夫について

大木 武、大木 勲、山口清直、中村健太郎（結城病院整形外科）

#### Sloping typeという成人脊柱変形一手術症例において一

三原唯暉（浜松医科大学整形外科）

#### Sloping typeという成人脊柱変形一高齢運動器検診において一

三原唯暉（浜松医科大学整形外科）

#### 脊椎手術中のプロポフォル使用量の影響一TcMEPにおけるanesthetic fadeの検討一

後迫宏紀、吉田 剛、小林 祥、長谷川智彦、大和 雄、坂野友啓、有馬秀幸、大江 慎、三原唯暉、戸川大輔、松山幸弘

（浜松医科大学整形外科学講座）

#### 椎骨動脈損傷を発症し、脳梗塞を続発した頸椎損傷の二例

寺本道雄、徳山良之、山野健太郎、影井祐介（宇治徳州会病院整形外科）

#### 心房細動を有する患者の腰椎手術後に脳梗塞を発症した一例

山本りさこ、竹本正瑞、定地茂雄、本山 満、加藤智弘（厚生連吉田総合病院整形外科）

スーパーマイクロサージャリーにおける血管吻合の習得：MICROCHIRSIM®と ANASTOMOSIS TRAINING KIT®との比較  
 井下田有芳、Philippe（順天堂大学医学部整形外科）  
 Chloe Galmiche、Juan Jose Hidalgo Diaz、Paul Vernet、Sybille Facca、Gauthier Menu、Liverneaux  
 （ストラスブール大学手外科）

多様な固定法が可能な鋼線締結型創外固定の開発

市原理司、原 章、工藤俊哉、鈴木雅生、石井紗矢佳（順天堂大学附属浦安病院手外科センター）  
 リベルノ フィリップ（ストラスブール大学手外科センター）  
 五味基央、丸山祐一郎、内藤聖人（順天堂大学附属浦安病院整形外科）  
 金子和夫（順天堂大学整形外科）

整復困難なGaleazzi 類似骨折の一例

渡部 寛、橋口 宏、園木謙太郎（日本医科大学千葉北総病院整形外科）  
 小寺訓江、南野光彦、高井信朗（日本医科大学整形外科）

人工膝関節全置換術患者における腰椎、股関節、膝周囲の骨密度、その相関について

小川亮三（医仁会 武田総合病院整形外科）  
 奥村法昭、谷川仁士、増子文子、久保充彦、中島 亮、前田 勉、今井晋二（滋賀医科大学医学部整形外科）

骨粗鬆症性脆弱骨折の治療経験

仲田公彦、中島保典（東大阪病院）

私達の  
 フランス  
 研修  
 1

# 日仏整形外科学会交換研修プログラム報告

大阪医科大学  
 藤城高志先生

2016年6月から2018年5月の間、日仏整形外科学会交換研修プログラムの下、ボルドー大学第1脊椎外科で研修させていただきましたので報告いたします。

ボルドーはフランスの南西部にあり、大西洋まで車で約30分、スペインとの国境まで約2時間というロケーションです。冬は日本ほど厳しくはありませんが、雨が多く、こちらの人々にとって家で家族と過ごす季節だそうです。夏は非常に乾燥していて、暑くはありますが日陰に入れば非常に涼しく、夜は10時頃まで明るく、公園は日光浴する人で溢れかえっています。

市内の3つの大聖堂の他、ガロンヌ川沿いのブルス広場や水鏡を中心とした景観も世界遺産に登録されています。その市内を走るトラムはA線からC線の3路線があり、美しい町の景観を損なわぬように通電のため

の架線がなく、町のシンボルのひとつとも言えます(写真1)。私たちは、Jardin Publicという大きな公園の近くに住んでおり、アパートの目の前の通りの奥にはQuinconces広場のジロンド派記念碑を眺めることができます。アパートの斜向かいには教会があり、日中は30分毎に鐘が鳴ります。アパートの前の通りには、2019年からトラムのD線が開通することになっています。

皆さんご存知の通り、ボルドーと言えばワインで有名です。スーパーマーケットには多くのボルドー産ワインが並び、郊外にはブドウ畑が広がっています。また海も近く、秋から冬にかけては町のいたるところで牡蠣の露店が並びます(写真2)。ちなみに、フランス(ボルドー?)では牡蠣は必ず生食し、焼いたりフライにするという概念はありません。



●写真1



●写真2

ボルドーでは日本とは違うおいしいものがたくさんありますが(しかも安価で)、“サンドイッチ”に勝るものはありません。日本で想像する“サンドイッチ”とは違い、固いバゲットにハム、チーズ、トマトを雑然と挟んだもので(写真3)、学生やインターンが昼食によく食べています。最初フランスに来た時、“なんとも味気のないものを食べもの”と思っていたのですが、小腹が空いた時やどこかに出掛ける時などに食べ続けていると、自分たちの生活になくてはならないものになってきます。習慣とは不思議で恐ろしいものです。日本に帰ってきた今では、“あのサンドイッチ、もう一度食べたいね”とことあるごとに言っています。



●写真3

## ■ Bordeaux University Hospital Spine Unit 1

Jean-Marc Vital教授が主催するこの教室は(2017年からVital教授は退官され、現在はOlivier Gille教授が主催)、3人の教授、5人の外科医、そして半年毎に入れ替わる5-6人のインターンで構成され、年間約2000件の脊椎手術が行われています(写真4)。ボルドーと言えば、派手な脊柱変形の矯正を思い浮かべますが、行われている手術は、椎間板切除、腰椎後方除圧固定、頸椎前方固定が大半を占めています。脊椎外科において、ここはフランス国内でも名門中の名門であり、インターンもこの病院に配属されることを皆誇りに思っています。そしてものすごくハングリーです。それは“早く一人前の外科医になりたい”ということなのですが、教授

の前立ちでも彼らは一步も引きません。見ているこちらがヒヤヒヤしてしまうほどです。また、常に数名の留学生が在籍しています。チリ、アイルランド、ポルトガル、アルゼンチン、インド、南アフリカ、モロッコ、アルジェリア、ニュージーランド、など、世界中から留学生が集まってきます。



●写真4 ボルドー大学第1脊椎外科 カンファレンス後の一コマ

## ■ Ibrahim ObeidとLouis Boissière

そんな中で、複雑な脊柱変形を担当しているのは、Ibrahim ObeidとLouis Boissièreの2人です。彼ら2人は今まで私が見た外科医とは全く違う次元の手術をします。側弯症を含めてPedicule Screwの刺入はもちろんのこと、骨切りの場合にも全く透視を使いません。そしてどちらも頭が非常に良く、さらに手術や研究など、何かにつけて面白いアイデアを持っています。

成人脊柱変形の手術においては、Pedicule Subtraction Osteotomy (PSO)やVertebral Column Resection (VCR)などの椎体骨切りをガンガンやっている印象でしたが実際はそうではなく、後方椎体間固定にPonte骨切りやSmith Perterson骨切りをうまく組み合わせて矯正を行っていました。Obeid、Louisどちらに聞いても“椎体骨切りは合併症も多いので、できるだけそれを使わずに手術を計画している”とのことで、椎体骨切りは彼らの得意とするところかと思いましたが、その適応は非常に慎重であったのが印象的でした。

Obeidはものすごい速さで手術をしますが、手が何本もあるかと錯覚してしまうほどで、助手をしている

こちらがついていくのがやっと、という感じです(写真5)。週に1-2度、プライベートクリニックで彼の手術に助手として参加していましたが、これが大変貴重な経験となりました。Obeidは非常に気難しく厳しい人で、渡仏した当初は手術の介助も何から何までダメ出しされて大変でしたが、時間が経つにつれて色々教えてくれるようになりました。彼はとんでもなく複雑な手術をしますが、教えてくれることはいつも非常にシンプルなことばかりでした。私がボルドーを去る時、“どんな難しい手術も、ひとつひとつのステップを完璧にこなせば、絶対にやり遂げることができる”というメッセージをくれましたが、彼の手術、そして教えてくれたことは、まさしくその一言に集約されており、とても感動したのを覚えています。

LouisはObeidにとって“弟子”的な存在で、長年彼の下で手術を教わってきたそうです。彼も非常に手術



●写真5

が上手で、しかもObeidとそっくりな手術をします。しかしObeidとは対照的(?)に、Louisはいつも明るくニコニコして、皆から愛される存在でした(写真6)。私は“成人脊柱変形の手術適応を作る”ための研究の一部を担当していましたが、Louisとは研究について多くのDiscussionをかさね、大きな助けとなったとともに、彼らのリサーチマインドを知ることができ大変勉強になりました。



●写真6

## ■ フランスでの生活

2016年5月、まず私が単身で渡仏し、銀行口座の開設、住居、子供が通う学校など、生活に必要な契約を行いました。とにかく、まず銀行の口座を開設しないと何も始まらないのですが、これには多くの書類とサインが必要な上に時間も非常にかかる作業で、とても苦労しました。フランス(恐らくヨーロッパ全域において)では、移民の問題でEU圏外の人間が生活に必要な手続きを行うのは非常に難しくなっているようです。しかし担当してくれたCazalaさんは非常に親切な人で、彼女のお陰で今フランスで生活できたと言っても過言ではありません(写真7)。口座開設後も、銀行とは関係ないことでも私たち家族をサポートしてくれていました。

フランスにやって来た当初は、生活していくだけで精一杯です。“わからない”だけならまだよいのですが、

その上に、電気、水が止まった、車がなくなった、裁判所から保険の未払金の支払い要請がきたなど、多くのトラブルにも見舞われます。しかし、こういうことにもだんだん慣れてきます。

なぜ慣れてしまうかという点、それは良く言うとフランス人の“懐の深さ”、正確に言うと“いい加減さ”のためです。とにかくフランス人は“時間通りに仕事をする”とか“正確に仕事をする”ということがほとんど無理ですが、逆にこちらもそれを強要されることもありません。生活全般においても、日本で受けるようなサービスを期待すると大変落胆することになります。3か月も生活すると全く期待しなくなり、逆にその“遊び”の部分を楽しむようになります。

その最たる例がバスです。一応時刻表はありますが、今まで時間通りにバスがやって来たことは一度もありません。また、バスに乗ったのに運転手が近くのスーパーに買い物に行ってなかなか発車しない、なんてこともよくあります。しかし、バスやトラムは予め回数券を買って乗車後にチケットを検札機に通しますが、その検札機が壊れていて、運転手に“今は壊れてるから、チケットは通さなくていいよ”と言われ、結局タダで乗ってしまうこともしばしばです。万事がこんな調子です。

息子の学友や妻の友達の家族から家に招待されることも多く、そこから色々なことを学んでいます。民族紛争、イスラム教やユダヤ教などの宗教のこと、アフリカでの政治問題など、日本で生活していれば全く

知らなかったことを色々考えるようになります。またそれだけでなく、彼らは日本のこともよく知っており、彼らから日本のことを学ぶこともしばしばあります。公園で知り合ったセルビア人家族は、“コソボ紛争の時、日本は私たちに経済援助を含めて色々なサポートをしてくれて感謝している”と言って、手厚くもてなしてくれました。またアルジェリアの男性は、“戦後、日本が経済大国になれたことを、アフリカの人たちは皆respectしている、君たちは本当に凄い国に住んでいる”と話してくれました。

最初は自分たちの生活だけで精一杯だったのが、半年も経つとどこかに出かけたくくなります。フランスでは、2月に1度、2週間の休みがあり、さらにバカンス時期(日本での夏休み期間)には2か月の休暇があり、皆それを楽しみにしています。しかもこれは子供達だけではなく、皆がこの時期に休みをとるため、病院も

含め町中は定期的に閑散としてしまいます。私たちもこのフランスの風習に習い、家族で色々なところに旅行に出かけました。

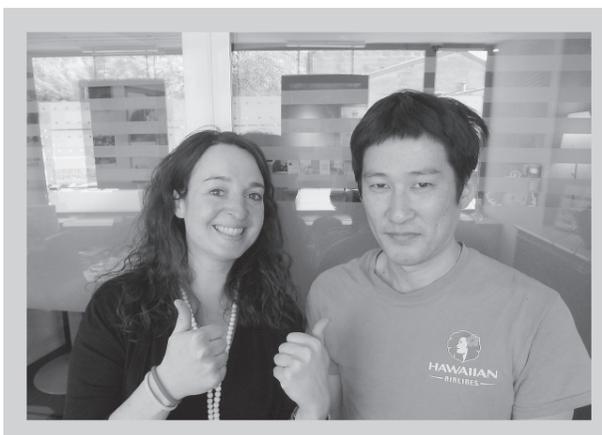
ポルドーはスペイン国境からも近く、2~3時間あればバスク地方へ行くことができます。我々日本人にとって、地続きの国境を跨ぐだけで、高速道路の制限速度が変わったり、“Merci”が“Gracias”になるのは不思議な感覚です。スペインはヨーロッパの荘厳な雰囲気の中に(ジブラルタル海峡を挟んでアフリカ大陸と面しているからだと思います)、エキゾチックな雰囲気を感じることが出来ます。私たちには2歳と5歳の子供がおり、フランスでは子連れでレストランやピストロに入るのは非常に敷居が高く感じます。しかしスペインのバルは子連れで賑わっており気兼ねなく食事することができます。この留学中、幾度となくスペインを旅し、我が家にとってスペインはもう一つの留学先、といったところでした(写真8-10)。

## 最後に

日本の脊椎外科の診療では、“神経の除圧”や“不安定性を固定する”というのは2つの大きな手術治療の概念です。フランスの脊椎外科においてはこの2つの上に、“矢状面アライメントを矯正する”ことも非常に重要な概念でした。そして、この矢状面アライメントの考え方はもちろん今に始まったものではなく、フランスとその脊椎外科の歴史に脈々と流れてきたものと感じられます。現在、この脊椎矢状面アライメントとその矯正手術は、脊椎外科分野において世界中でひとつの大きな潮流となっていますし、まだまだ不明な部分が多く最終的な答えは導き出されていません。しかし、もしこのブームが終わっても、彼らは“矢状面アライメント”を追求し続けるでしょう。それが何故かと問われると、私の語彙力では答えることはできませんが、今はそれが“文化”というものなのだと認識しています。

## 謝辞

このような素晴らしい機会を与えてくださった日仏整形外科学会の役員の方々に厚く御礼申し上げます。そして、この留学・渡仏に関して協力していただいた藤原憲太先生、そして2年間という長い留学を許可していただき、“思いっきり遊んでくればいいよ!”と送り出してくださった大阪医科大学の根尾昌志教授に改めて深謝いたします。そして最後に、この留学期間様々な手続きや身の回りのこともフランス語を駆使して私を支えてくれた妻と、異国の生活も全く臆することなく、そして元気に帰国してくれた息子たちに、この場を借りて“ありがとう”と伝えたいと思います。



●写真7



●写真8 ビルバオ ビスカヤ橋



●写真9 パンプローナの美しい街並み



●写真10 マヨルカ島 世界一美しいと言われるEs Trencのビーチ

## 平成30年度日仏整形外科学会交換研修帰朝報告

尾道市立市民病院整形外科  
迫間 巧将 先生

### はじめに

私は平成30年5月、6月の2ヵ月間、日仏整形外科学会交換研修制度を利用してフランスで研修を行いました。前半の1ヵ月間はNiceで、後半の1ヵ月間はToursで研修を受け、5月末から6月初旬にかけてNiceで開催されるNice Shoulder Course 2018にも参加してきました。研修先の病院では、肩関節外科を中心に、様々な症例を見させていただき、貴重な経験をさせていただきました。その中から、印象に残ったことについていくつかご紹介させていただきます。

### Niceでの研修

Niceでは、Hôpital Pasteur 2にてPascal Boileau教授にご指導いただきました。肩関節外科においては世界でもナンバーワン、と言っても過言ではない超有名人、オリジナルの術式も持っている教授であり、期待に胸を躍らせて渡仏しました。

宿泊先は、中心街に近いMassenaのAparthotelを選びましたが、立地的には最高であり、病院へ通うのも、観光へ行くのも、ちょっとした買い物にも、とても便利な場所でした。Pasteur病院はトラムの終点であり、問題なくたどり着きました。病院内では、他国からフェローに来ていたOlivier(オランダ)、Nathalie(ベルギー)、Adam(アメリカ)の3人と共に行動することとなりました。彼らは1年~1年半の期間、Boileau教授のも

とで研修、リサーチをして、帰国するとのことでした。OlivierとNathalieの2人は、英語もフランス語も完璧で、実際に患者の予診を取ったり臨床データを取ったりしていました。Adamは、フランス語はそこそこ、という感じでしたが、なんといっても英語が母国語であるため、問題なく馴染んでいました。私はというと、英語もフランス語も中途半端、なかなかコミュニケーションがうまく取れず、最後まで苦労しました。

スケジュールですが、Boileau教授の手術日は月曜午前、火曜、木曜にあり、月曜午後、水曜は外来、金曜日は研究日でした。手術日には、鏡視下腱板修復術、鏡視下Latarjet法、人工肩関節置換術と一通り見ることができました。中でも、リバー型人工肩関節置換術のコツや、鏡視下Latarjet法の手技の完成度の高さ、安



●Boileau教授(右)と私

全性など、実際に目の前で見ることで感動しました。1ヵ月間の滞在で、Boileau教授の手術は31件あり、他の医師たちの手術も合わせると、かなりの量の手術を見ることができました。外来は、Boileau教授は4部屋をぐるぐる回るスタンスで、フェロー、レジデントがそれぞれ1部屋ずつ担当して予診や臨床スコアをとっていました。これは効率的！と思いきや、Boileau教授は話が長かったり、片っ端からカルテと患者さんの写真・ビデオを撮りまくったりするため、外来のスピードはかなり遅く、フェロー達も外来は疲れると言っていました。外来はほぼフランス語ですが、珍しい症例も多く、ときどき患者そっちのけで英語でディスカッションが始まることもあり、治療方針の決め方、リハビリ手術の方法、実際の臨床成績など、手術以外にも多くのことを学ぶことができました。(もちろん患者さんは放置のままです！)

フランスでは、レントゲン、MRIなどの画像は他院(画像センターみたいなどころがあるようです)で撮ることが多いようで、しかも本人がデータを保管するシステムになっていて、大きな袋に画像ファイルをたくさん詰め込んで外来に来ます。それもプリントアウトしてある紙のファイル(運が良ければCD-R付き)です。しかもPasteur病院は紙カルテであるため、カルテやコンピュータの中には画像データがまったく残っていません！そのため、毎回毎回Boileau教授は紙カルテの中身や画像ファイルをすべて携帯電話で撮りまくるのです。そのような環境の中でも臨床研究で多くの



●Adam(左)とOlivier(右)と私

データをだしているのでもやっぱりスゴいのですが、画像解析は紙ベースのアナログで行っていることもあり、結果はあまり鵜呑みにしないほうが良いのかもしれないと感じました。

上記のように、Niceでは多くの貴重な経験ができ、素晴らしい毎日を送ることができましたが、心残りなこともありました。フェローやレジデント達とは仲良くなれたと思いますが、一緒に食事に行ったり、飲みに行くようなことは一度もなく、わりと孤独な生活でした。次のToursでの研修では、もっとこちらから積極的に話しかけていこう、と思いながらNiceでの研修を終えました。



●Niceの海岸沿いの素晴らしい景色

### Nice Shoulder Course 2018

ニースでの研修の最後に、Nice Shoulder Course 2018に参加しました。日本からも20人以上参加しており、全世界から900人を超える参加者がいる非常に大きな研修会でした。内容は、フランスでのマルチセンタースタディの成績などを報告するのがメインで、今回のテーマは“人工肩関節の長期成績”でした。日本でリバー型人工肩関節が導入されてまだ数年ですが、フランスでは15年以上の使用経験があり、リバー型人工肩関節が長期においても良い成績が維持されることを確認しました。解剖型人工肩関節については、10年を超えるとglenoid looseningが進んできて成

績も落ちてくるとのことで、長期成績を考えても今後さらにリバーサが増えていく可能性があると感じました。それ以外にも、ステムレス人工骨頭や表面置換、interposition arthroplastyの成績、60歳以下に対する人工関節置換術の長期成績など、みんなが知りたい情報も満載で、非常に有意義な3日間でした。日本からも、船橋整形外科の菅谷啓之先生、松木圭介先生、千葉大学の橋本瑛子先生、大阪医科大学の三幡輝久先生、日産玉川病院の望月智之先生など、多くの先生方が演題発表されており、大変刺激を受けました。

毎晩パーティーが開催され、初対面の外国人とひたすら英語でトーク！という貴重な(ヘビーな)経験もできました。こちらは名刺を渡して名前を覚えてもらうのですが、向こうからは名刺を頂けず、名前も覚えにくく、一期一会のような感じになってしまったのが残念でした……。最終日はBoileau教授宅でのパーティーでした。家の中にエレベーターもあり、プール付きでNiceの街を見下ろせる丘の上の大豪邸に圧倒されました。

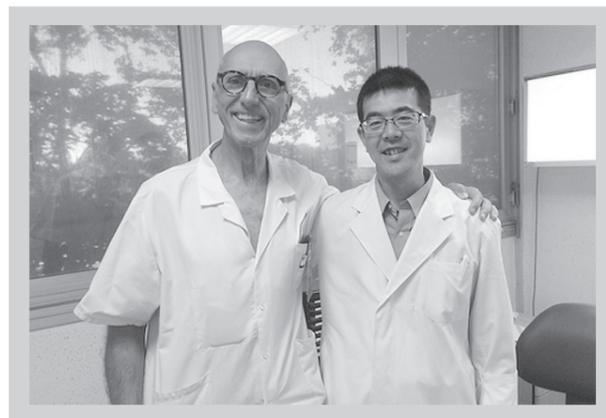
こうして、1ヵ月間の楽しいNice生活が終了し、Toursへと移動することとなりました。

## Toursでの研修

Toursでは、大学病院(CHRU hôtaux de Tours)のうち、Hôpital TrousseauでLuc Favard教授にご指導いただきました。Favard教授とは、渡仏前から秘書を通さず直接やり取りをしており、Nice Shoulder Courseでも挨拶していたため、スムーズに研修に入ることができました。フェローは1人、サウジアラビアからWaleedが来ており、Waleedもフランス語ペラペラでした。他に、Toursではレジデントが多く、皆やさしくてNice guyばかりでした。Niceでは、昼食は各自で好きに、という感じで一緒に食べたことはありませんでしたが、Toursには医師用のカフェテリアがあり、なんと無料でピュッフェ形式、食べ放題！食後のコーヒー、デザート、果物もあり、ほぼ毎日、他のレジデントたちと一緒にカフェテリアで昼食と会話を楽しむ時間がありました。日本の漫画やアニメのことを聞かれたり、ワールドカップの話題が出たり、英会話の勉強にもなっ

て楽しい時間を過ごすことができました。

研修のスケジュールですが、月曜は手術日、火曜の午後は外来、それ以外は自由！なんと、Favard教授は6月は予定が多くて忙しいようで、1週間に1日半しか直接ご指導いただくことはできませんでした。手術も1日4件ほど、TKA、THA、TSA、ARCRを1例ずつ、という感じで、Favard教授の肩関節の手術は1ヵ月間に5例ほどでした。Niceでの研修と比べるとなんともさみしいかぎりでしたが、その代わりに、自由時には他のドクターの手術を見ることにしました。肩関節、TKA、THA以外にも、人工肘関節置換術や人工足関節置換術、腓骨頭脱臼の症例、肘部管開放術など、いろいろな手術を見ることができたので、それはそれで良かったかなと思っています。ただ、Favard教授の外来は、すべてフランス語、患者数は少なく、症例ごと



●Favard教授(左)と私



●Toursの旧市街の落ち着いた雰囲気

のディスカッションもないため、内容的にはほとんど理解できないままで残念でした。

最後にFavard教授から、今回の滞在中にはあまり対応する時間がなく残念だった、手術も少なかったし、食事にも誘えず申し訳ない、と声をかけていただきました。たしかに手術や外来などの臨床的な面では物足りない研修でしたが、Niceではできなかった若手医師とのコミュニケーションを通じて、フランス医師たちの現実を知ることができました。また、フランス人の温かさや、日本LOVEな感情も、味わうことができましたので、これはこれで良い研修であったと思っています。

## フランスでの医師キャリアアップ

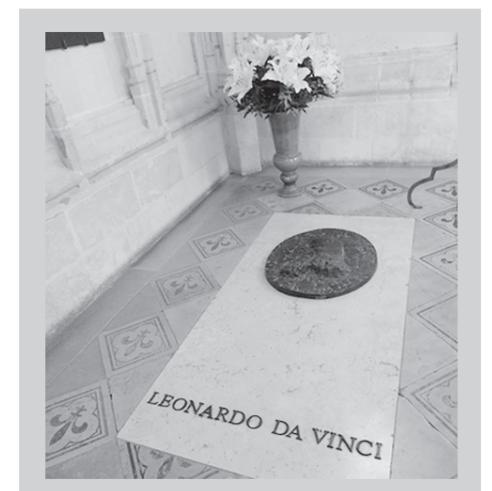
フランスでは、初対面の人に「レジデント終わったのか？」と必ず聞かれました。レジデントって何？という感じで、最初は意味が分からず、会話が続きませんでした。レジデントとは、医学部卒業後5年間かけて、整形外科のすべてを学ぶ期間のことで、原則1ヵ所です5年間過ごすようです。レジデント期間が終了するとシニアと呼ばれるようになり、1人前の整形外科医として何でもできるとのことですが、レジデント期間中は半人前扱いで給料も安いようです。レジデント終了後にポストレジデントとして大学病院に残ることもありますが、大学病院ではシニアドクターとして手術もできます。ということは、大学病院クラスでもシニアになりたての医師が普通にバンバン執刀しているということで、医師によって手術のレベルが格段に異なり、医療の質は大丈夫か？と思うこともたくさんありました。そうやってスキルアップしていくうちに、優秀な医師は有名になって患者を呼べるようになるとプライベートホスピタルに移ってさらにバンバン手術をする、とのことでした。ということは、手術の技術でいうと、プライベートホスピタル>大学病院、ということになります。さらに、一般病院のほうが大学病院よりも手術が上手い、という話もあり、ひょっとしたらプライベートホスピタルや一般病院の見学をしたほうが手術の勉強としては良かったのかも？と思うよう

になりました。とはいえ、そうなるフランス語がペラペラであることは必須であり、ハードルはとても高いですが。

## フランス文化に関して

フランスでは、日曜、祝日は休む日、という認識が強いようで、土日には電車やトラムが減便になったり、店が閉まっていたり、と不便な一面もありました。祝日に至っては、トラムは走っていないわ、店は開いていないわ、観光どころではない日もありました。また、ストライキも労働者の権利、ということで、私がフランスに滞在している間にも国鉄のストライキがありました。なんと3ヵ月間もの間、フランス国鉄SNCFがストライキを行い、3日通常運行して2日休み、3日通常運行して2日休み、を繰り返していました。ちょうどNiceからToursへの移動日がストライキにかぶってしまい、あわてて宿泊延長、次の宿泊先の予定変更、飛行機変更、電車変更などなど、バタバタしましたが、どうにか無事変更できて安堵しました。

今回滞在中のNiceは観光地でもあり、人が多く、治安も良く、非常に住みやすいところでした。Toursも治安は良いようで、特に身の危険を感じることはありませんでした。ただ、Niceでは街中を歩いていると、マシンガンを持った警察官とすれ違うことも多く、一



●レオナルド・ダ・ビンチのお墓

私達の  
フランス  
研修

## 3

## 日仏整形外科平成30年交換研修プログラム帰朝報告

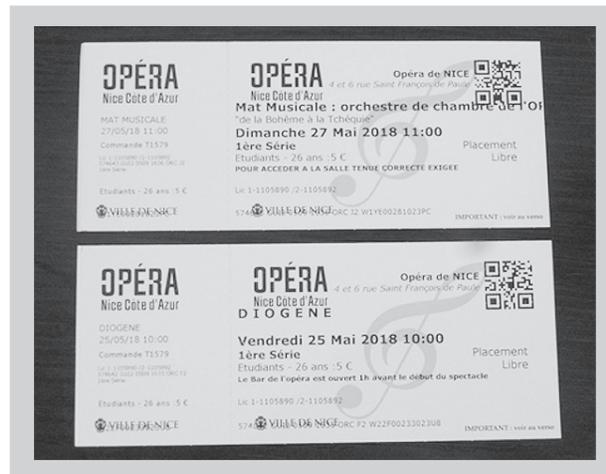
千葉大学大学院先端脊椎関節機能再建医学講座  
折田 純久 先生

歩間違うと犯罪に巻き込まれる可能性があるかも・・・と少し不安にも感じました。実際、Niceにいた時にParisでテロがあったようですし、Toursにいた時にもParisで事件があったようです。また、フランスはタバコ天国！とにかく常にタバコの煙が舞っています。さすがに屋内は禁煙となっていますが、一歩外に出たらタバコOK。タバコ休憩は労働者の権利として認められているのか(?)、店員さんが外でタバコを吸っている間、お客さんは店内で待ち続けることもあります。病院に至っては、玄関を出たら患者もドクターもタバコを吸っていて、カルチャーショックを受けました。Boileau教授も、タバコは成績不良因子になるから患者には禁煙させる、と言っていました。フランスでは禁煙は難しいようです。

せっかくのフランス生活なので、観光にも行ってきました。Amboiseでは、かの有名なレオナルド・ダ・ビンチが晩年を過ごしたクロ・リュセ城にて数々の発明を見て、アンボワーズ城でお墓参りをしてきました。Orleansといえば、やっぱりジャンヌ・ダルク！ということで、ジャンヌ様に会いに行ったわけですが、スタイリッシュできれいな街並みにも感動しました。Parisでは、ルーブル美術館で本物のモナ・リザを見て、あまりの小ささに拍子抜けしたり、サモトラケのニケやミロのヴィーナスが手の届くところにあることに感動したり、あまりの広さと作品数の多さに疲れて素通り

していたら観たかった作品を見過ぎてしまったり、と貴重な体験もしました。凱旋門とエッフェル塔も素晴らしく、圧倒されました。全仏オープンの会場であるローランギャロスも見なかったのですが、全仏終了後に行ったためか、なんと工事中で入れず、残念でした。

Tours滞在中にロシアワールドカップが開幕し、フェローとの会話もやっぱりサッカーの話が多かったです。日本が戦前の予想を覆して良い試合をしたため、「日本イイネ！やったネ！」(もちろん英語で)と言われました。



●人生初のオペラ鑑賞チケット

## ●おわりに

フランスでの研修を通して、日本では味わえない素晴らしい経験をさせていただきました。とともに、海外の優秀なドクターたちと触れ合って、まだまだ足りないことが多く頑張らないといけないなあ、と反省することもあり、気持ちを新たに心機一転、頑張りたいと思います。

最後になりましたが、フランスでお世話になった Pascal Boileau教授、Luc Favard教授をはじめ多くの先生方、そしてこのような素晴らしい機会を与えてくださった日仏整形外科学会の役員の方、ならびに岡山大学の尾崎敏文教授、そして2ヵ月間快く送りだしてくださった尾道市立市民病院整形外科の先生方に厚く御礼申し上げます。

このたび、日仏整形外科交換研修制度を利用したフランスへの短期留学の機会を得ましたので御報告いたします。

## ●プログラム参加のきっかけと概要

本プログラムは、日本人若手整形外科医の国際的育成を目的に日仏整形外科学会とフランス整形外科学会(SOFCOT)の間で行われている交換研修制度であり、1990年から当医局の同門医師を含む多くの若手整形外科医が本システムにより渡仏、両国間での交流がなされています。

私自身は平成29年5月に千葉大学および船橋整形外科病院が栃木県日光市で主幹として開催した第14回日仏整形外科学会にてシンポジストとして登壇し、さらに他セッションで座長をご一緒させていただいたフランス・ボルドー大学(University Hospital Bordeaux France)のJean Marc Vital教授とお話しを通じて本プログラムに応募することとなりました。先方の秘書さんとの数ヶ月にわたるやりとり・手続きの後、フランスへは2018年10月から11月にかけて滞在、ボルドーとパリの2都市にて各々1施設(University Hospital Bordeaux France)、および2施設(La Pitié Salpêtrière病院、Henri Mondor病院)において、手術見学を中心に研修を行いました。

## ●ボルドー(Bordeaux)滞在中

最初の研修先であるボルドーはフランス南西部パリから南に約500kmの都市であり、ワインの産地として世界的に有名でありその街並みが世界文化遺産にもなっている大変美しい街です(写真1)。その地にあるボルドー大学は脊椎手術ではフランスで最も件数が多い年間2000件の手術を行っており(写真2)、特に今回直接の訪問機会を頂くことになったVital教授(写真3)や同院のIbrahim Obeid医師(写真4)は日仏整形外科を含む国際学会等で小児特発性側彎症や成人脊柱変形の手術加療などのトピックスを含む脊椎外科領域で発言力のある著名な先生方であり、これらの先生方を訪問す



●写真1 ボルドーの名所の一つであるブルス広場。手前にははられた水鏡広場を通じて写される景色、中世の風景を幻想的に映し出す風景です



●Orleansのスタイリッシュな大通り

る形で研修を行いました。

平成30年10月初旬の奈良での日整会基礎学術集会が終了した直後、羽田からパリを経由してボルドーに到着したのは日曜日の夜23時。日本とは7時間の時差に身体を慣れさせる暇もなく翌月曜日、火曜日と骨切り矯正術、側弯矯正と多くの手術見学をさせていただきました。同院では、日本の施設では半日から一日がかりの大きな手術が縦で数件続きながらも定時で終了するスピードや医療者側の連携のスムーズさに新鮮な驚きを感じました。その他にもL5/Sを含む前方固定、すべり症に対する固定術等を含め、非常に多くの手術に入らせて頂きました。主に手術見学に入らせていただいたDr. Obeidはもともと小児側弯から脊椎外科を始めたのことで小児側弯手術をベースとして成人脊柱変形矯正にも造詣が深く、日本でも最近話題になって

いる脊柱矢状面アライメントの矯正理論や手術手技の実際など、論文や学会では学べない活きた知識を学ぶことができました。

また、今回は別途同院に留学中の林和憲先生(大阪市大・写真3)に手術見学や日常生活に至るまで非常に多岐に渡りお世話になりました。その一環が同院への国内・国外留学生との交流であり、ホームパーティー(写真5)や食事など非常に多くの交流の場を設けていただきました。このような文化・人的交流も、本交換研修制度の非常に重要でかつ楽しい側面であると思います。

ボルドー滞在中のもう一つの目的は、ワインの勉強です。ボルドーには世界でも有数のワイン博物館があるほか(写真6)、週末はボルドーの世界的なワイン生産地(メドック、サンテミリオンなど)を巡り、ワインそのものの特徴(産地、ブドウ畑とその種類、評価など)

はもちろん、ワインにまつわる様々な深い歴史を学ぶことができました。たとえば訪問地のひとつであるサンテミリオン(Saint-Émilion)の歴史は先史時代にまで遡り、紀元2世紀に古代ローマ帝国により植えられたブドウを元に、後世の修道院僧侶達によってワイン醸造が本格的に始められたことに端を発しています。中世の面影を残すその街並みと景観はユネスコの世界遺産にも登録されています(写真7)。今回のシャトー訪問で試飲した極上のワインの味は、ワインの世界の深淵に踏み込むに十分な魅力と奥深さがあり(写真8)、「酒は飲んで酔えて、楽しければよい」と思っていた自分にとってはワインの深い歴史まで学ぶことでますます深く味わえるという体験ができ、衝撃的かつ有意義な訪問でした。



●写真8 シャトー見学にて、ワインの講義と試飲の様子

## パリ (Paris) 滞在

ボルドーをあとにし、フランスでの2番目の滞在地は言わずと知れたフランス首都である花の都・パリです。スケジュール調整の関係で1週間程度のごく短期間の滞在でしたが、研修としても文化的にも、非常に有意義な滞在となりました。

パリにてひとつ目の訪問地となったのはパリ13区にあるピティエ=サルペトリエール(La Pitié Salpêtrière)病院です(写真9)。同院は1656年に設立された非常に歴史のある病院で医学の主要専門分野の総合教育病院として知られており、脊椎外科分野ではペディクルス



●写真2 最初の研修施設であるボルドー大学(University Hospital Bordeaux France)病院の遠景



●写真4 手術室にてIbrahim Obeid先生と



●写真6 ボルドーにあるワイン博物館。デキャンタを模した幾何学的な建物が特徴です



●写真3 研修先手術室にてJean Marc Vital教授と。左より筆者、Vital教授、林和憲先生(大阪市大)



●写真5 メキシコ、フランス・マルセイユ、アルジェリアからの国内外留学生とのホームパーティー



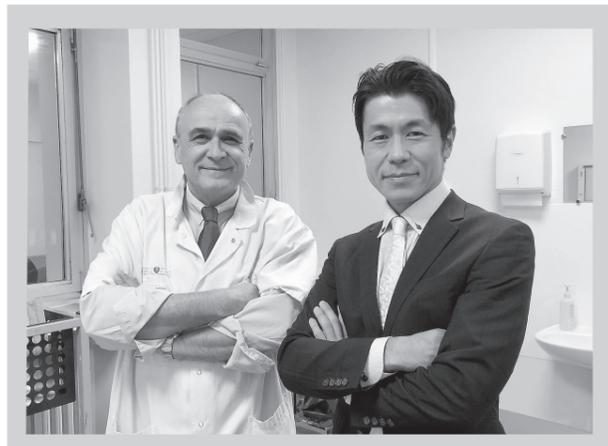
●写真7 中世の風景を残すサンテミリオンにて



●写真9 第2の研修施設であるパリ・ピティエ=サルペトリエール(La Pitié Salpêtrière)病院

クリューの祖と呼ばれるRaymond Roy-Camille先生が所属されていたほか、脳神経内科分野ではBabinski 反射を発見・発表されたJoseph Jules François Félix Babinski先生が所属されていたことで知られています。また、多くの芸能人やスポーツ選手の診療・手術をしていることで知られており、元横綱の貴乃花関が膝の半月板手術を受けたことでも知られています。

今回、同院では整形外科のJean Yves Lazennec教授のもとで主に研修をさせていただきました。Lazennec教授はもともと脊椎専門の医師でいらっしゃるものの股関節外科にも造詣が深く、以前から脊椎から骨盤



●写真10 Jean Yves Lazennec教授と。手術中は沢山の冗談を通じて場を和ませることをモットーとする先生でした

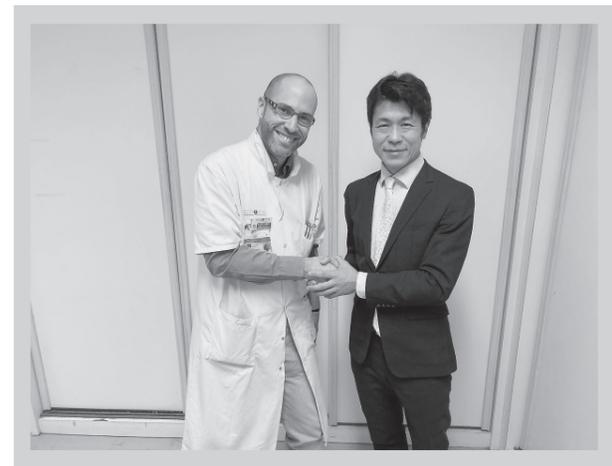


●写真11 THA手術の様子(一部加工)。脊椎外科医である自分も多くのことを学びました

のアライメントに関する研究成果を御報告されており最近では全身撮影・アライメント評価システムであるEOS Imagingを用いて股関節外科疾患の患者やTHAの術前後の骨盤、全脊椎アライメントに関する研究に携わっていらっしゃる先生です(写真10)。Lazennec教授は脊椎手術も股関節手術もシームレスに行われる非常にパワフルな整形外科医であり、脊椎手術が専門である私も久々に人工関節用の手術着(通称・宇宙服)を装着しTHA手術等の研修を含めて行いました(写真11)。Lazennec教授のもとでの研修についてはパリに留学中の金永優先生(京都大学)にスケジュールを調整していただき、パリ滞在中における生活を含めて非常にお世話になりました。こちらでも滞在期間は短いものの脊椎の慢性疾患、様々な手術手技を学ぶことができ大変有意義な研修でした。

続いて訪れた最後の施設は、パリ公立病院連合に属するアンリモンドール(Henri-Mondor)病院です。こちらでも外傷や慢性疾患など含め多くの手術治療が行われておりましたが、特に主任教授のCharles Henri Flouzat-Lachaniette教授は38歳と若齢ながら組織をうまく指導しながら診療科を講座を運営しており、そのガバナンス体系や診療環境に非常に感銘を受けました(写真12)。

パリでの課外時間は、やはり世界的な観光都市であ



●写真12 Henri-Mondor病院のCharles Henri Flouzat-Lachaniette教授と。38歳と若齢ながらしっかりと講座運営をされている先生でした

るパリの観光です。市内をはしるセヌ川沿いで趣味のランニングをしながらルーブル美術館、凱旋門、エッフェル塔、そしてノートルダム大聖堂など、一連のパリの著名な名所は一通りまわることができました(写真13)。また、小学生の頃から愛読しミュージカルや映画などもくまなくチェックしていた小説「レ・ミゼラブル」の作者であるビクトル・ユーゴー(Victor Hugo)氏が過ごしていたパリの居室を改装した博物館なども訪れ、文化的にも非常に有意義な滞在時間を過ごすことができました。一方、パリでの滞在ホテルは2015年にパリのライブハウスを中心に発生した同時多発テロ事件の近所であり、滞在中は治安について若干心配に思うところもありましたが実際には非常に治安が安定しており、ワインショップやベーカリー巡りをしながら特に問題なく帰国の日を迎えることができました。ただし、帰国後数週してからガソリン税値上げに反発する凱旋門周辺での暴動が起こったとの報道に、タイミングがずれていたら渦中に巻き込まれていたかもしれないと非常に驚くと同時に、海外滞在中における安全確保とそれにまつわる情報収集の重要性を改めて実感することとなりました。かつて18世紀のフランス革命などを通じて大きな市民運動を起こしながら世界を変え、進出してきたフランス国民の革命の血はこのようなところにまだ脈々と伝わっているのかもしれない。



●写真13 ルーブル美術館前。映画の舞台にもなった同美術館は非常に趣のある、そして巨大で美しい施設でした

## 最後に

今回脊椎外科を中心に研修させていただいた国であるフランスは、同じく脊椎外科が発展する米国等とはまた異なる形で独自の発展を続けてきた国であり、「欧米」としてひとくくりにしてしまうには適さない国の一つなのかもしれません。特にインプラント開発や脊柱変形矯正理論などにおいて世界の中でも中心的な存在として注目されているためかねてから訪問したい国の一つでした。実際に訪れて感じたのはフランスの整形外科医のパワフルさであり我々も見習わなければならないと一貫した次第ですが、同時に日本人でなければできない初診から一貫した診察、画像診断、診断と手術・その後の綿密なフォローとそこから得られる知見の取得と発表など、まだまだ我々が中心に世界に発信していかなければならないことも多く残されています。そのようなチャンスに気づくためにも、本交換研修制度は非常に有用であると言えます。

今回の交換研修制度を通じてこのような形で渡仏の機会を与えていただきました日仏整形外科会長の金子和夫先生、交換研修係の藤原憲太先生、事務局の大橋弘嗣先生、さらに訪問先調整にて多くのご尽力を頂きました本間康弘先生をはじめとする多くの関係各位に深く御礼申し上げます。末筆ながら日本と仏国間での国際交流と、それによるさらなる両国間の整形外科医療の発展が益々進むことを祈念し筆を置きたいと思えます。

## 日仏整形外科学会交換研修帰朝報告

順天堂大学医学部附属練馬病院整形外科  
井下田 有芳先生

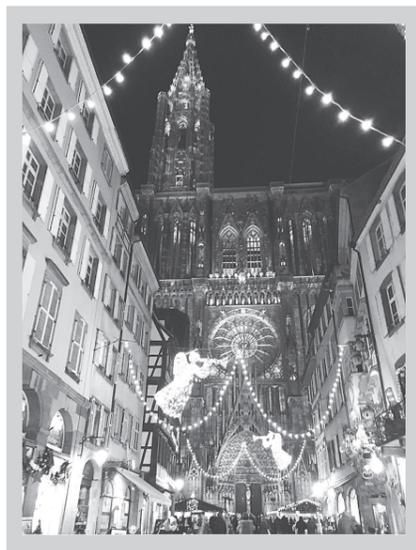
私は、平成29年の10月より日仏整形外科学会の交換留学を利用して、フランスのストラスブールにて1年間、研修を行いましたので、報告させていただきます。

### はじめに

現在、私は順天堂大学整形外科に所属し、一般整形外科医として勤務しております。入局当初、救急外来での手外科症例が多く、手外科に興味を持つようになりました。指導して下さる上司がストラスブールに留学経験があり、留学の体験を聞く機会があり、私も是非ストラスブールに留学し、研修をしたいと考え、今回希望させていただきました。

### Strasbourg

ストラスブールは、フランスの北東部のドイツとの国境に位置しております。街並みは木造のドイツ様の家が多く、食事もビール、ソーセージなどドイツの文化の影響が多く見受けられますが、フォアグラやワインなどフランス文化もしっかりあり、非常に魅力的な街です。フランスの中でも、クリスマスマーケットで有名な街で、冬季のクリスマスシーズンには多くの観光客がフランス国外からも訪れます。また、Europe Unionの機関が多く集結しており、ヨーロッパの中心として知られています(写真1)。



●写真1 ストラスブールの街並み

### 臨床研修

ストラスブール大学には、大きく3つの附属病院があり、その中のCentre de Chirurgie Orthopédique et de la Main (CCOM)という病院を拠点として研修を行いました(写真2)。

CCOMはストラスブール中心部より、トラムに乗車して15分ほどいったIllkirchという街にあります。この病院は、整形外科単科の病院で、私の研修した手外科センターのほかに、主に慢性疾患を扱う一般整形外科で構成されています。

手外科センターでは、Liverneux教授、Facca教授の他スタッフが4名、レジデントが7名おり、年間約5000件の手外科の手術を行っております。また、救急外来には、ひっきりなしに手外傷の患者さんが来院しており多くの救急症例も見ることができます。

毎朝、8時よりスタッフカンファレンスが行われており、まず、研修医が前日に見た全ての救急患者のプレゼンテーションを行います。その際に、どういった処置を行ったのか、次の外来はどうなっているのかなど細かくチェックをされます。もし、カンファレンスで研修医が行った治療では不十分、または変更が必要

と判断した場合には、カンファレンス後すぐに患者さんに連絡を行い、その都度対応をしていました。治療前後の創の状態など全てを写真におさめ、提示しているため、カンファレンスで治療に関しては一目瞭然で、言葉がわからなくても非常に勉強になることが多かったように感じます。その後、スタッフにより前日の手術症例のプレゼンテーションが行われます。こちらも、術前、術中、術後の写真が含まれている手術記事を提示しながらプレゼンテーションを行い、手術の様子がわかりやすく、自分が立ち会えなかった手術症例も勉強することができました。

朝のカンファレンスが終わると、Liverneux教授の手術見学、外来陪席、論文作成、レジデントと一緒に救急外来の診察などを行います。

教授の手術症例は、ほとんど全ての症例に手洗いをさせていただきました。日本と違い、手術機械の準備はレジデントが行い、手洗いの看護師さんはつかずに通常は教授とレジデントの2人で行います(写真3)。

1年間で、様々な症例を見学させていただきましたが、午前中だけで約8件ほどの手術を行っていました。Liverneux教授はいつも“simple is best”ということをもっとにしており、どの手術もシンプルにスピーディーに進んでいきました。そのなかで、Liverneux教授が開発に携わっているProsthelasta®というインプ



●写真2 研修先であるCentre de Chirurgie Orthopédique et de la Main (CCOM)



●写真3 Liverneux教授との手術



●写真4 人工手関節Prosthelasta®

ラントを使用した人工手関節全置換術をみることができました。この人工関節は、髓内釘で固定された橈骨のインプラントと、スパイダープレート様の手根骨側のインプラントで構成されております。対象症例として、関節リウマチや、変形性手関節症に使用しておりました。まだ短期成績しか出ておりませんが、結果は良好です。また、同様の高齢の粉碎した橈骨遠位端骨折に対し、同様の橈骨インプラントを用いて置換術を施行しており、こちらに関しても短期成績は良好であり、私の研修中にも症例数が増えていたので今後の長期成績が楽しみです(写真4)。

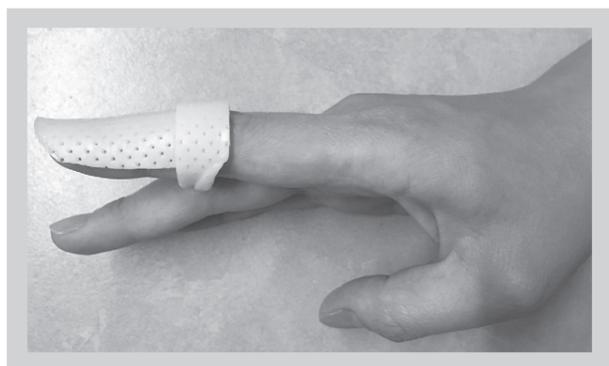


●写真5 DaVinciを使用したロボット手術

Liverneux教授は手外科領域でロボット手術をおこなっており、こちらも見学する機会がありました。月に一回はDaVinci XIを使用したロボット手術をHôpital civilというStrasbourgの街の中心の病院で行います。腕神経叢損傷の神経移行や神経鞘腫の摘出などを行っていました。実際にDaVinciに触れさせていただきましたが、手ブレが全くなく緻密な作業ができ、その動きのスムーズさに非常に驚いたと同時に感動しました(写真5)。

Liverneux教授は新たな適応症例や他科とのコラボレーションなど、ロボット手術の発展を目指し日々様々なアイデアを出され、非常に刺激を受けると共に、一緒にそのプロジェクトに参加をすることができ、大変嬉しく思います(写真6)。

そして、週に2回はLiverneux教授の外来陪席をさせていただきました。日本にいる間、外来陪席を行うチャンスなかったため、臨床診断の方法など非常に勉



●写真7 マレット指に使用する背側装具



●写真6 Liverneux教授と



●写真8 同僚とルクセンブルグで行われた研修に参加

強になりました。また、外来診察室のすぐ横に、装具技師さんが待機しており、ギプスを含め様々な装具を患者さんそれぞれに合わせて作成され、また医師と技師間でのコミュニケーションがよく取れるため非常にいいシステムと感じました。ここでは、マレット指は骨性、腱性ともに手術療法よりも装具治療で治療することが多く、背側の装具で治療をしております。石黒法よりも成績はいいと教授はおっしゃっていました。指の計測を行い爪と装具を接着剤で固定し、DIP関節を過進展位で固定し、治療しております。背側で固定することにより、爪の変形のリスクはありますが、固定を行なっても物をつまみやすく、ピアノ等も弾けるといふ利点があります(写真7)。

また、Liverneux教授が様々なコースの案内をしていただけるため、フランス滞在中に、手関節鏡やカダバートレーニングなどに参加してきました(写真8)。

滞在中に、Les Journées du Président Les Prothèses de la Main et du Poignetという手、手関節の人工関節学会に演者として参加しました。フランスの南東に位置するLes Vansという小さい街で開催され、ここはOllier病で知られるLouis Léopold Ollierの出生地であります。フランスの第2の都市と言われるLyonより車で3時間いったところにある、非常に自然が豊かな場所にある小さな村です。私は前述した、Prosthelast®についての発表を行いました。研修病院のスタッフはみんな日程が合わず、単身での参加となりましたが、発



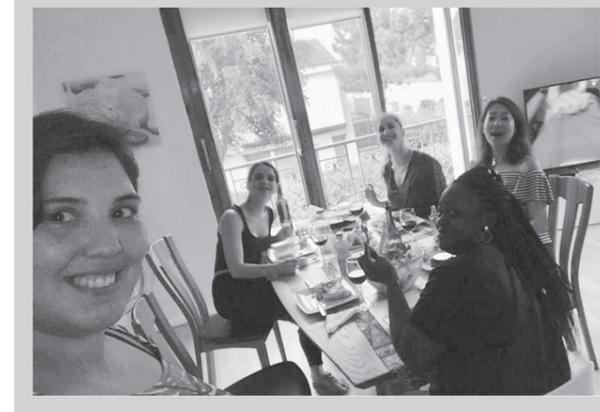
●写真9 Microsurgery diplomaの練習風景

表は問題なく終了しました。この学会のために、フランスで生活してから初めてレンタカーを借り、Lyonからの一人で運転をおこないました。Le Vansから帰国して数ヶ月経った際に、速度違反の手紙がとどきました。やってしまったと落胆しましたが、何事もなく無事に参加し帰って来れたことを考えると、速度違反による罰金もいい思い出と思います。

フランスでは5年のレジデント期間で独り立ちするため、多数のDiplomaが必須となっております。その一つのマイクロサージャリーのDiplomaの試験を受験しました。2週間の研修期間中、顕微鏡下での血管、神経縫合の練習を行ったのち、ラットを使用した実技試験を行います。その後、ビデオ講座があり、整形外科、手外科だけでなく、マイクロサージャリーが必要となる科のマイクロサージャリーの基礎知識を学び、



●写真10 フランス人レジデントと海外フェローとのホームパーティー



# 私達の フランス 研修

## 5

### 日仏整形外科学会交換研修プログラムに参加して ～Life in France was Beautiful～

栃木医療センター整形外科  
内田 勲 先生

筆記試験があります。その後、マイクロサージャリーに関する論文を作成します。実技試験、筆記試験、論文のそれぞれに点数がつけられ、合計点で合否がつき、私は無事に合格することができました(写真9)。

また、私は、臨床研修だけでなく基礎研究施設であります、Laboratoire ICubeにも研修に行かせていただきました。Bahlouli教授、Facca教授のもとマイクロサージャリーに関する研究をおこないました。研究内容に関しては、まだStrasbourg大学で研究途中の内容であるため、公表はできませんが、毎週火曜日と空いている時間をみつけて、研究を行いました。臨床研修の合間での研究となるため、思う様にいかないことも多々ありましたが、同僚と共に研究をすすめられ、臨床研修だけでなく、バイオメカニクスの研究についても少し学べたことは大きなことだと思っています。

今回の研修病院は、有名な手外科病院であるため、世界各国から研修にきており、フランス人のレジデントだけでなく、様々な国の友人ができたことも大きな財産であると思っています(写真10)。

また、ヨーロッパは各国へのアクセスがしやすく、

休日は、フランス内の違う都市や、隣接国などに旅行にいき、ヨーロッパの文化にも触れることができます。私はフランスに滞在中に、フランス国内はもちろんのこと、その他の9カ国に旅行に行くことができ、旅行好きの私にとっては大変貴重な経験ができました。

#### 最後に

留学当初は、やはり文化の違いや言葉の壁に悩まされましたが、教授の先生方を含め、同僚に助けられて日々楽しく研修を行うことができました。特に、Liverneaux教授には大変お世話になり、教授という恩師であると同時にフランスのお父さんの様な非常に私にとっては大切な方です(写真11)。

フランスでお世話になった、Liverneaux教授をはじめスタッフやレジデントの皆様、また研究所の皆様、また、この様な機会を与えてくださった、金子教授をはじめ、順天堂整形外科教室の先生方、日仏整形外科学会の先生方に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



●写真11 Liverneaux教授の家にお招きいただいて

#### 初めに

2018年9月2日から11月30日まで日仏整形外科学会プログラムに参加させていただき、様々な病院を巡らせていただきました。パリでは11月末から例の「黄色いベスト」デモが激化し、12月に入るとストラスブールのクリスマスマーケットではテロが起こっていましたが、幸いにも私と妻には特に被害なく無事に日本に帰ることができました。

「黄色いベスト」デモは私たちが帰宅した翌日からかなり激化して、騒動を鎮静化させようとしたマクロン大統領が火に油を注ぐような発言をしますます混沌としています。フランス人にとっていい形に収まるように祈っております。現地では会長のHernigo先



●Hernigo教授

生をはじめ、多数の人々にお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。Merci!

さて、フランスの病院での経験を以下に記しましたが、かなりうる覚えのところが多いのも事実なので細かい数字の間違いがあったらごめんなさいと先に謝罪させていただきます。

#### Paris (Henri Mondor Hospital)

最初の9月にお世話になったのがHenri-Mondor Hospitalです。Hernigo先生がProfessorを務めておられる病院です。フランスでは病院がPublicとPrivateで分かれています。日本での公立、私立とははっきり異なります。フランスで必要な医療は保険によって賄われ、日本同様、患者の自己負担は少ないです。その自己負担が低い治療を主に担うのがPublicの病院です。

ここでは日本の大学病院同様、研修医含めて様々な学年のDrが働いています。3つの手術室を使って緊急含めて一日8-10件ぐらい、月曜日から金曜日まではほぼ毎日何らかの手術が入っています。土曜日にも緊急があれば行きます。私は好きな手術を見ていいよ、と言われたので可能な限りすべての手術に入っていました。この病院では器械出しのNsがおらず、Dr 2人以上+外回りNsですべて行っていました。フランスではこれが標準のようです。

もう一人のProfessorであるFlouzat先生は専門が脊椎で、多数の脊椎の手術を行っていました。手術は非常

にスムーズで、時に歌いながら手術をするような陽気な先生でした。「この病院で、タフで知的なチームを作りたいんだ。」と力強く語っていたのが印象的でした。



●Flouzat教授と

食事をごちそうになりました。奥様の作った夕食はフランスの家庭料理が中心で、妻と一緒にとてもおいしくいただきました。フランスにきて一か月、知り合いの少ない土地で心細くなっていた私には非常に心温まる歓迎をいただきました。手術に関しては、トラクションテーブルを使用したTHAと通常のTKAを見学させていただきました。Vie先生はこれまで4000件を超える手術をされているため、手術がスムーズなのはもちろん、数多くのPitfallに関する知見をもっており、非常に勉強になりました。「10年たった時に、私の手術のことは忘れていい、ただ、ここで一緒に楽しい食事をしたことは忘れないでほしい」と最後までやさしかった先生、もちろん手術のこともしっかり覚えていきますよ！

### Paris (Clinique Arago)

高名なKerboull先生の病院でもFellowとして受け入れていただきました。フランスに来てからコンタクトを取ったにもかかわらず、非常に快く受け入れていただきました。Kerboull先生はもちろん、病院のスタッフも非常にフレンドリーで、楽しく見学させていただきました。Kerboull先生の手術は本当に上手としか言えない、素晴らしい手術でした。Revisionや、金属アレルギー患者に対するTKAなど珍しい症例も見せていただきました。Kerboull先生の他にも経験の豊富な先



●Luc Kerboull先生と

### Rouen (Clinique du Cedre)

10月からはPrivate病院の見学が主になります。ジャンヌ・ダルクが処刑されたことで有名なRouenではPascal Vie先生の手術を見させていただきました。Vie先生は長身で非常にやさしい先生でした。見学の前日にはわざわざ自宅にお招きいただき、ご家族と一緒に



●Pascal Vie先生とその奥様

生が多く、様々な手術を行っていました。できればもう少し多くの件数を見たかったのですが、日程の都合上あまり行けなかったのが心残りでした。

### Paris (Centre medico chirurgical PARIS5)

AMISでおなじみのLoade先生の手術を見学させていただきました。Loade先生の手術を動画で見たときはその手際の良さにかかなり驚いた先生です。ビデオで何度も見たので、今回通常のAMISで驚くことはないだろうと思っていましたが、最近皮切がビキニラインに変更されており、さらに大腿骨頸部周囲の靭帯を切らずにゆするだけでゆるめる(実際にやっている先生ならばその難易度の高さがわかんと思いますが)というマイナーチェンジがあって結局驚くことになりました。

Revisionも前方から行っていました、あまりに大腿骨のステムの抜去が速いので、大変さのかけらも感じない手術になっていました。ふつうはこの10倍ぐらい苦労すると思うのですが。

今回は股関節鏡の手術も見学させていただいたのですが、一番衝撃を受けたのがこの手術でした。関節包前方を手探りであてて、切開、関節唇・関節包縫合ととんとん拍子にすすみ、あっという間に終わりました。その手術時間40分。あまりに鮮やかだったので、何かコツはあるのかと質問攻めにしましたが、最終的には経験だそうです。



●Loade先生の手術

### Lyon (Clinique Saint Vincent de Paul)

フランス第二の都市で美食の街であるLyonではMarchetti先生のTHAを見学させていただきました。髭の素敵な、比較的若い先生でしたが、トラクションテーブルを用いてのDAA (AMIS)を行っておりました。基本的には膝が専門とのことでしたが、THA、TKAともに年間2-300件行っているとのことでした。Marchetti先生も非常に親切な先生で、手術の疑問点からLyonにおける観光名所の案内までいろいろ気を使っていたいただきました。手術についてVie先生とは異なるPitfallをいくつか教えていただきました。

### Toulouse (Clinique de l'Union)

エアバスの本社があることで有名なスペイン国境近くにある街では膝のDavid先生と股関節のFouilleron先生にお世話になりました。David先生はMedactaのMy kneeを使用してキネマティックアライメントにこだわ



●David先生、Fouilleron先生と

ったTKAを行っていました。Fouilleron先生は通常のAMISにてTHAを行っていました。どちらの先生も、週2-3日の手術日で年間300件近く手術を行っている先生です。David先生はSpain生まれの陽気な先生で、一日6件近くあるTKAをスムーズにこなしていました。Fouilleron先生はボルドー生まれの背の高い先生で、基本的にTHAのみ手術していました。最初の一年は後方、前方アプローチで手術を行った結果、前方が優れていると感じてそれ以来前方アプローチで手術しているとのことでした。



●David先生の診察室にて

## Paris (Necker Hospital)

Neckerはパリにある小児専門の病院です。大学の股関節班の先生方と一週間だけ合流してNecker病院のNejib先生を訪問させていただきました。Triple Osteotomyをはじめ、さまざまな疾患・手術を見学させていただきました。一週間朝から晩までみっちり手術見学、カンファレンス、講義、食事を入れていただき、大変勉強になる訪問となりました。



●Nejib先生、大学股関節班の先生と

## Nice (Clinique Saint George)

日本でもリゾート地として名高いニースは11月末なのにもかかわらず昼間は半そでで過ごせるくらいでした。こちらではダンディなD'Hondt先生にお世話になりました。南フランスで初めて前方アプローチを導入した先生で、時間の関係で2件ほどしか見学できませんでしたが、スムーズな手術でした。先生にも前日に食事にお招きいただいて、美人な奥様とご一緒させていただきました。ニースに住んでいたらパカンスに遠くに行く必要ないですね、と振ったところ「7月8月のニースは騒がしいので逆にパリに行っている」とのことでした。

## 終わりに

非常に勉強になる日々でした。フランスは近隣諸国から優秀な医師が集まってくるので、医療水準も高く、その結果患者も同様にフランスに手術を受けに来ます。病院のセンター化が進んでいるので症例が集まり、医師は特殊な症例含む手術経験を大量に積むことができ、腕を上げることができます。整形外科医としてはかなり理想的な環境のように思いました。渡仏前は欧米の人は器用ではなく、おおざっぱな手術をする、といったステレオタイプの言説も耳にしていたのですが、実際

に来ると日本人以上にこだわりが強く、丁寧な術者も多かった印象です。日本人以上に器用な術者が多いと思いました。

日本人と一番違うと思ったのは、休暇に関する意識で、どこの病院でも医師は週2-3日以上以上の休みに上乗せして6-12週間の長期休暇を取っていることです。病院の決まりが6週間となっても、7-10週間取っている先生もいるようで、このあたり日本でも見習うといいと思います。病院経営者の皆様ぜひご検討を。

日常生活で自分の意識の変化が出てきたのには驚きました。よくヨーロッパに移籍した日本人サッカー選手が、ヨーロッパは他人を気にしないで生きていけるので楽しい、とインタビューに答える姿をよく見ましたが、今回私もそれを本当に実感しました。フランスの人々は本当に他人を気にしないし、それでいて冷たいわけではなく、困った人を積極的に助けるメンタリティもあるので、私も妻も日本にいる時よりのびのび生活できることに気づきました。道端で困っていると、近くの人がどんどん大丈夫？声をかけてくれます(もちろんParisでは少し警戒したほうがいいですが、それ以外では本当に心配して声をかけてくれる親切人が多いです)。

景色も美しく、食事もよく、特に予定なく街をぶらぶらしているだけで幸せを感じられる日々で、Life is beautifulの言葉の意味を実感できました。こればかりは実際に来ないとわからないと思うので、もしこれ



●最後、妻とParisのイルミネーションを背景に

を読んでいただいた若い先生方がいましたら、積極的なプログラム応募をお勧めします。

最後に今回のプログラムを紹介いただいた西脇先生、また参加を許可していただいた松本守雄教授、栃木医療センター長谷川院長・吉田整形外科部長にはこの場を借りてお礼を申し上げます。

## フランス研修報告記

昭和大学江東豊洲病院整形外科  
田邊智絵先生

### はじめに

2018年度9月より2か月半ほど日仏整形外科学会の交換研修生として渡仏させていただきましたので報告をさせていただきます。今回は、主に小児整形外科の研修をできる病院としてParis : Hôpital Necker-Enfants MaladesとToulouse : Hôpitaux de Toulouseの2か所を紹介していただきました。下記、訪問した順に報告させていただきます。

### Paris : Hôpital Necker-Enfants Malades

9月3日より1か月半ほど研修させていただきました。Neckerは毎年、本学会を通じて多くの研修生が訪れていることもあり、日本人の受け入れに対してとても好意的でありました。私のmentorをしていただきましたのは、Prof. Philippe Wicartです。小児整形で足の外科を専門とされており、ご本人も本学会を通じ日本(山口大学・金沢大学)に来日研修をされています。また、私自身が股関節を専門としていることもあり、Dr. Nejib Khouriにもご教示いただく機会が多くありました。Dr. Nejib Khouriは第28回日本小児整形外科学術集会にも招待講演者として来日された先生です。私が大学院生として研究していたAVN、DDHの検診・治療法、Perthesに対するROWO、青年期におけるRAOなど、股関節に関して後に様々なdiscussionやpresentationを求められました。

Neckerでの1日ですが、7時45分からの朝カンファレ

ンスから始まり、インターンによって昨日の手術症例の提示・病棟患者の申し送りが毎日行われました。上腕骨顆上骨折はほぼ毎日手術され、1週間にSCFEが3例搬送されたときはその頻度に驚きました。カンファレンス中にたびたび、「日本ではこの症例の場合どうするのか?」と意見を求められる事が多くdiscussionをよしとするフランス人の発信能力の高さを感じました。外来は、Prof. Philippe Wicartのもと、先天性内反足(French method)凹足、外反偏平足、DDH、麻痺性疾患、側彎症、骨腫瘍など様々な疾患を冷静に丁寧に的確に診療されていました。手術は、Triple骨盤骨切り・大腿骨外反骨切り・脚延長・外反偏平足・垂直距骨・骨腫瘍に対する大腿骨置換術など多岐にわたりました。SCFEに対するDunnでの術中血流モニタリングも日本で改変されたものを見たことはありましたが、フランスでの手技を実際に確認することができた事は改めて勉強になりました。また、SCFEのtilt angleにおけるin situ・ORIFなどの判断も日本とほぼ同等の考えでしたが、難治例もあり、この疾患の難しさを感じました。また、研修中に2施設のリハビリ病院に定期的に連れて行っていただきました。リハビリ病院ではgait labを有しており、解析などを教えていただき実際の臨床所見と解析を比較するのも有意義でありました。研修中にDen Haag (Holland) で開かれたEuro Hipにも参加させていただきました。小児に関する話題は、青年期に使用する人工股関節stemについてなどごくわずかでありましたが、日本から発表に来ていた同門の先生と再会久しぶりに日本語で会話をすることができホッとしまし

た。Neckerでは整形外科も女医が多く、常勤医師の半数は女医が占めていました。またフェローの4名も全員女医、インターン7名のうち半数は女医、実習に来る医学生4名も全員女医と、大変華々しい環境でありました。Neckerにいたすべての方がパリジェンヌというわけではありませんが、女医が多いこととしてパリでは医学生の約7、8割は女学生であり、男女共働きがスタンダードなフランスでは結婚や出産後の離職も少ないとのことでありました。それが成り立つ社会保障の基盤がある事は勿論ですが、子育てに関しては妻だけでなく夫や両親の協力がある事、家事料理などは夫も行う事が多いと聞き日本との差に驚きました。ちょうどタイムリーに日本での医学部入学問題がフランスでもニュースとなっていたため、「日本のあれはどうして起こったの?」と聞かれた次第であります。

パリの生活に慣れ、週末はパリ市内・郊外・国外と日が昇る前から夜遅くまで出かけ文化・食事・ワインを堪能しました。パリ滞在中に1度の雨にも、危ない目にも会うことなく大変充実した1か月半、若干の後ろ髪惹かれる気持ちでToulouseに旅立ちました。



●右から2番目 Prof. Philippe Wicart、左から1番目Dr. Nejib Khouri

### Toulouse : Hôpitaux de Toulouse

Toulouseに行く際にとまどったこと、それは日本で収集できる情報量が極端に少ないことでした。Parisでは日本人も多く住んでいる、かつ旅行者も多いため、PC検索すると何かしらの情報が載っています。しかし

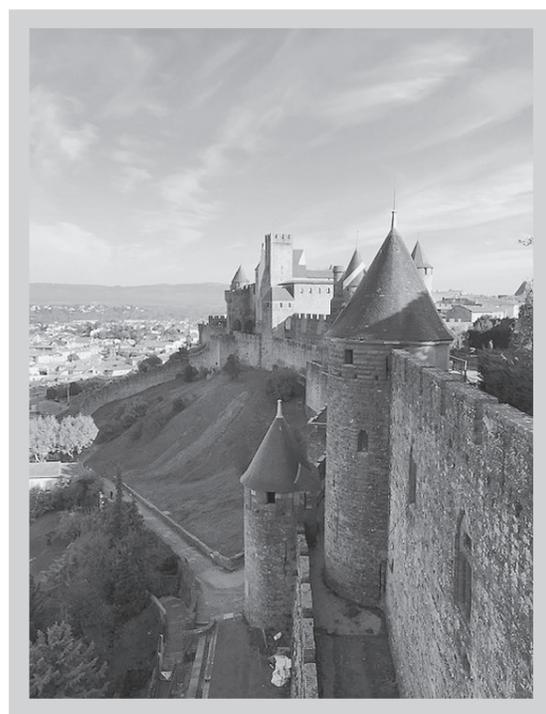
地方都市では簡単にはいかず出国前かGeoglemapと病院のHP・駅の路線図などに頼るこの状態でした。某旅行書では2ページほどの情報量であり先人のお知恵も拝借できず、出国前から若干の不安を覚えておりました。救いは、Prof. Philippe Wicartの「とってもいい街でParisよりさらにいい人が多いから大丈夫!何も心配することないよ。」その言葉を信じて向かった次第でありました。実際にToulouseに到着し私の不安はすぐに払拭されました。まず街がきれいであること、公共交通機関がきれいであること、東洋人の私を見ると親切に英語で話しかけてくださる方がいたことです(本来ならフランス語を話すべきであるが、これは私の不勉強に他ならないのですが、反省。) ToulouseではProf. Franck Accadbledのもと研修をさせていただきました。今回、Hôpitaux de Toulouseでの日本人の受け入れが初めてということもあり当初から対応に不十分なことはないかなど事細かに気を使ってください、日本的なきめの細かい親切な心意気に感銘を受けました。Prof. Franck Accadbledは37歳の時にProfessorになられScopic surgery・Spine Spurgeryを専門とし、日本では2017年・2018年と夏季小児整形外科学術研修会year reviewでPerthes、SCFEの文献が紹介されています。Prof. Franck AccadbledがEPOS committee memberでもあり、Toulouse研修序盤でしたが、EPOS training seminar (EPOS BAT course)で3日間集中講義を受講する機会をあたえていただきました。この会は毎年Viennaで開催されEPOS主宰のため欧州からの参加が多く、東洋人は台湾の方と私の2名でした。Seminar自体の内容がとてもまとまっており今回のテーマである麻痺性疾患の理解を深めることができました。また会期中にProf. Franck Accadbled よりcommittee memberの先生を紹介していただきまして、ここでも心づかいを有難く思いました。また、欧州らしくseminarの最終日には全員でシャンパーニュ乾杯と優雅な雰囲気でもありました。機会がありましたらまたEPOS training seminarを受講し勉強したいと思っております。Seminar終了後は、友人が住んでいるNice/Èeに立ち寄りToulouseに戻った次第です。Toulouse研修では朝7時半のカンファレンスの後に毎日英語論文の抄読会がありました。毎週金曜に次の週の5日分(土日以外)の論文をいただくのですが、duty業務のない私には時間

があったため論文を読む時間が十分にあり、手術の手洗いの場でProf.Franck Accadbledと論文についてdiscussionをしていると次の手術が始まる間に新しい論文がmailboxに届いており、大変楽しい論文連鎖がありました。おかげさまで英語論文に接することが苦ではなくなりました。外来では外傷・ACL損傷・膝蓋骨脱臼・脚長不等・側彎症・骨腫瘍などの疾患が多く手術は、膝/足関節鏡を用いた手術・脚長不等・外反偏平足・DDHなどの症例に対して見学をしました。手術に関しても積極的に手洗いをさせていただき、先の疾患などは比較的私の所属する大学病院でも扱うことの多い事でもあり勉強になりました。また、初めて見る手術としてVan Nes術がありました。大腿骨骨幹部と脛骨近位で切断し、残肢の脛骨遠位を反転させて大腿骨に接続し、短肢での下肢機能を得る手術です。侵襲の大きい手術ですが、約6時間程度で手術を終了しておりました。DDH症例に関してはBig bossであるProf. Sales De Gauzy Jérôme にDega骨盤骨切り術やSalter骨盤骨切り術をととても丁寧にご教示いただきました。日本と比べDDH症例がフランスでは少な

いため日本はどのように手術を行っているのか大変興味があるとお話しされていました。Toulouseでは同時期にベトナムからtravelling fellowで研修に来られていた整形外科医Dr.Quynh, Dr.Xuxiと飲みに行ったときに、午前様で自宅のカギを紛失したことはいい思い出です。(翌日カギは発見され、なぜかインターンのカバンの中にありました。) 研修自体も毎日大変楽しかったToulouseですが、近郊で訪れてとても感動した都市があります。それはCarcassonneです。日本ではまだなじみの少ないとされる場所ですがフランスではMont Saint-Michelとならぶ人気です。2重の防備が施された欧州最古の城塞都市であり、ヨーロッパの基礎築いたカール大帝がこの都市の攻略をあきらめ退散するときに、当時街を治めていたカルカス(Carcas)が勝利の鐘を鳴らした(sonner)ことに由来するという伝説があります。荘厳で美しく時間をかけてみる価値のある場所と思えました。最終日には、Prof.Franck Accadbledのご自宅にご招待していただきましてdinnerをいただきました。(Prof.Franckのお手製料理。雰囲気もお料理も贅沢すぎてワインがよく回りました) Prof.Sales De Gauzy



●下段中央Prof.Franck Accadbled、下段左Prof.Sales De Gauzy Jérôme、上段右から2番目 Dr.Thevenin-Lemoine Camille



●Carcassonne

Jérôme、Dr.Thevenin-Lemoine Camilleとご家族とともに、共に研修の思い出、日本での働き方、フランスでの働き方、医師としてなどいろいろなお話をさせていただきました。

## Paris : SOFCOT 2018

ToulouseからParisに戻り、帰国前の11月12日-15日までcongressに参加させていただきました。スライドでのフランス語を追って理解できた発表もあれば、フランス語でのdiscussionは理解ができずに終わってしまう場面もあるのが実情でした。Toulouseでお世話になったDr. Thevenin-Lemoine Camille が教育研修講演をされておりました。Necker/Toulouseでもとお世話になった先生方と再会しご挨拶ができたことがうれしく思いました。帰国前に学会参加することを告げていたところ、Dr.Nejib Khouriに股関節超音波アトラスの古書をいただきまして有難く、また身の引き締まる気持ちになりました。SOFCOT中に日仏整形外科学会

金子会長、順天堂大学小林先生・本間先生達とお食事をさせていただく機会がありました。最後でありましたが、帰国前に日本語で会話をすることに懐かしさも感じながら研修を終えた次第であります。

## 最後に

素晴らしい機会を経験し今までの人生観をかえるような研修ができたことに感謝をしております。研修を契機に得たことを今後の学会の発展に還元できれば幸いです。今回の研修に際しフランスでお世話になりましたProf.Phillipe Wicart, Dr.Nejib Khouri, Prof.Sales De Gauzy Jérôme, Prof.Franck Accadbled, 日仏整形外科学会会長金子先生、役員の方々、最初に当学会のことをお話ししてくださいました瀬本先生、研修先を手配して下さった金城先生、不在を理解し送り出してくれた昭和大学江東豊洲病院・藤が丘病院整形外科の医局員の皆に心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。



●SOFCOT会期中にて 本間先生、金子会長、小林先生、内田先生



## フランス留学体験記

大阪市立大学大学院医学研究科整形外科学  
新谷 康介 先生

私は、2018年4月から3ヶ月間、Clinique Bizet (Institut de la Main)、Necker-Enfants Malades Hospital、Strasbourg University Hospitalへ留学させていただきました。この様な貴重な経験をさせていただき、本間先生、金城先生をはじめSOFJO役員の先生方、留学を受け入れて頂いた各施設の先生方、また大阪市立大学整形外科医局の先生方に深謝いたします。

### フランス留学開始まで

私は、市中病院と大学病院で研修を積んだ後、大学院に進学して学位(手外科・末梢神経外科)を取得いたしました。私は、以前より海外へ留学したいと考えていたのですが、国内だけでなく海外においても精力的に活動される同門の先生方と仕事をさせていただいた事が、大きなきっかけであったと思います。海外へ留学する目的としては、1)世界的に評価されている施設や先生のもとで研修を受ける、2)日本の常識は海外でも通用するか確かめる、3)海外の知り合いを増やして繋がりを広げる、事を考えました。多くの先生方のご支援によって、留学する事ができました。

4月から研修を予定していたClinique Bizet (Institut de la Main)、Necker-Enfants Malades HospitalはParis市内の施設です。私は、フランス留学後も他国に留学する予定があったため、できるだけ滞在費を減らすことを考え住居探しを始めました。Clinique Bizet (Institut de la Main)のFellowの先生の連絡先をお聞きし、住居について尋ねました。ある一人のFellowの先生が「Paris

郊外(Versailles方面)に私の家族と住んでいるが、治安も良く費用も安い。鉄道でのアクセスも問題なく、大変満足している」とおっしゃっていたので、某民泊仲介サイトを利用してSaint-Cloudのフランス人家族(夫妻、子供3人、ネコ1匹)宅にお邪魔することにしました。ホストはとても親切で、隣人たちとのホームパーティにも度々招いていただきました。子供達も人懐っこいため、日本の文化を教えたりする事はとても楽しかったのですが、週末～週明けにかけて毎週家族でどこかに旅行に行くため、留守中ネコの食事とトイレの始末は私の係となりました。最寄駅からエトワール凱旋門までは、鉄道で20分弱程度であったため、通常のアクセスは問題なかったのですが、悍しいストライキが起こってしまいました。週に数回、電車が大幅遅延(日本の感覚ではありえないですね!)地下鉄とバスは動いているのですが、、、完全に確認不足でした。

### In Paris

4月から2ヶ月間、Clinique Bizet (Institut de la Main)で研修させていただきました。施設でお世話になるまで知らなかったのですが、Prof. Gilbertが6月でリタイアされるとお聞きし、非常に残念でしたが幸いにして最後のフェローとなりました。他にフランス、イタリア、ルーマニア、ギリシャ、アメリカ、メキシコ、インド、中国からのレジデントとフェローがいました。ローテーションを組まれているレジデントとフェローは、6ヶ月間の研修を行います。私は小児疾患を勉強

したかったので、Prof. Gilbert とDr. Gueroに特にお世話になりました。第一助手をさせていただいたり、外勤先の小児病院まで連れて行って貰って外来や手術を見学させていただきました。Clinique Bizetの先生方はそれぞれ週20件程度の予定手術があり、まずその件数に驚きました。皆が卓越しておられるため全体カンファレンスはありますが、レジデントやフェローに対する教育は常に行き届いておりました。月に数回のMorning Lecture (Course)は手術前7:00より始まります。各スタッフの先生方がレジデントとフェローに対して、決まったテーマで講義(英語)をしてくれます。また手術中は、執刀医の先生からの説明や質疑応答が身振り手振りを交えてあります。洗練された手術手技だけではなく、自他国を問わない教育システムに

も感銘を覚えました。送別会や懇親会で楽しい時間を過ごしたり、時間があればレジデントとフェローでParisの美しい公園にピクニックに行ったりしていました(勿論ワイン片手に)。私のParis最終日に、Champ de Marsでエッフェル塔のシャンパンフラッシュを見ながら最後のピクニックをしたことは一生の思い出です。

6月から1ヶ月間はNecker-Enfants Malades Hospitalでお世話になりました。Prof. Wicartは小児の下肢疾患



●食事会とピクニック in Paris



●恩師Dr. Gueroと、ご自宅へ招待していただきました



●Clinique Bizetに行く途中のこの景色が好きでした

の討論は熱く、なかなか次の症例に進まないこともしばしばでした。レジデントやフェローの先生も、積極的に自分の意見を言っており、良い意味で日本とは異なる(?)慣習であると思います。大病院であること、また出生後手に負えず国外から受診しに来るケースもあり、日本では経験できない希少な症例を診ることができました。外来や手術中は、良い意味で色んな質問をして下さり、大変勉強になりました。手術後Hip spicaなどのギブスを、装具士の方が巻きに来てくれることは驚きでした。Dr.Khouriには、第28回日本小児整形外科学会でご講演頂いたDunn Procedureを、実際に解説を交えて見せていただくことができました。まだまだ勉強したかったのですが、時間が経つのは早く、Strasbourgへ移動しました。

### In Strasbourg

6月末から1週間 Strasbourg University Hospitalでお世話になりました。Prof.Liverneauxのロボット支援手術(手外科・末梢神経外科手術)がどうしても見たかった



●da Vinci操作中

で高名な先生で、本施設は過去に多くの日本の先生方が留学されておられます。毎朝7:45から全体のカンファレンスがあり、手術症例を検討します。先生方

たので、手術予定日に合わせて研修させていただくことになりました。Prof.Liverneauxはとても親切で、いつも丁寧に受け答えしてくださいました。朝は8:00



●偉大な先生方と

からカンファレンスが始まり、手術や救急症例の検討があります。時間厳守の精神は、日本より強い(?)感じがしました。Prof.Liverneauxの手術は、いつもシンプルかつ迅速に行われていました。「シンプルにできる手術に、難しく凝った手技は必要ない」とおっしゃりながら、常に新しいアイデアを取り入れる革新的な先生でした。ロボット支援(da Vinci)手術は、病院と少し離れた市内の施設で行っています。私が訪れた時は、神経鞘腫の核出術を遠隔操作で行っておられました。手術後にda Vinciに触らせていただきましたが、思った以上に繊細に動くため、確かに手外科・末梢神経外科手術でも使用できると感じました。StrasbourgはParisとまた違った、フランスとドイツの調和によって生み出された街であり、本当に美しい街でした。または是非戻ってきたいです。

### フランス留学が終わって

日本にいても海外の情報を得る事はもはや難しい事ではないですが、やはり生の声に勝るものはないと感じました。施設で実際に他のスタッフとコミュニケーションをとる中で、どこにでもある本音トークができます。その施設が評価されるまでに至った過程や努力、日本の良いところ悪いところも見えてきます。世界各国から集まってきた他のレジデントやフェローとの会話は楽しく、ワイン片手に各国の常識の違いを話したり、時には愚痴を言ったりして、よい人間関係を築く事ができました。住む場所が変われば視点も変わり、ちょっとした事でも毎日が刺激的です。今度は私が留学を考える先生方の何か役に立てるようになったら幸いです。このような素晴らしい経験をさせていただき、お力添えいただきました先生方に重ねて御礼申し上げます。

# 「私のフランス整形外科」 Maîtrise Orthopédique260号に寄せて

2017年1月にMaîtrise Orthopédiqueの260号に小生が受けたインタビューと小生の「KTプレートによる股臼再建」が8ページに亘って掲載されました。前者は小生のフランス留学の経緯やBichat病院のJacques Duparc教授の教室での経験や思い出、次にCochin病院へ行った経緯、Marcel Kerboull教授から学んだ股関節外科医としての考え方と厳格さ、とりわけ股臼再建と高位脱臼のTHAについて語り、帰国後の股関節外科医としての仕事や帰国後の苦勞やKTプレート作成と命名の経緯を述べました。日本とフランスの医学教育の相違点などのも尋ねられました。留学時代からの友人であるLuc KerboullやPascal Vieら同世代の友人の事、

Claras教授やDurandeau教授やHernigou教授やGuyen教授ら親しくしてきた友人の事、七川先生や小林先生や小野村先生や瀬本先生らが立ち上げられたSOFJOとAFJOの事、飯田教授と一緒に開催した京都での第12回AFJOの思い出などを語りました。その場を借りて高橋教授と老沼先生による第14回AFJOについても紹介させていただきました。

小生の「KTプレートによる股臼再建」においてはKTプレートの生い立ちとコンセプトや原臼位と許容できる高位についての考え方と根拠と妥協点について述べました。次いでTechniqueの詳細を実例を挙げてVideoを交えて説明し、自身の成績を紹介しました。小生は2011年にSOFJOTの名誉会員となり、フランスで教を乞うた恩師Marcel Kerboull教授や親友のLuc KerboullやDuparc教授や多くのフランス整形外科医への恩返しの気持ちを込めて書かせて頂きました。

2017年の1月28日の第14回Marcel Kerboull Institut Forumで小生は依頼を受けて「Actual Situation of Short Stem in JapanとMy Opinion on Short Stem」の講演を行いました。丁度その時にMaîtrise Orthopediqueの260号が発行されたので反響は大きかったと感じました。30年来の友人はもちろんの事、帰国後一度も連絡のなかったBichat病院やCochin病院で一緒だった複数の整形外科医からメールが届きました。何人かは第14回AFJOの日光に参加してくれました。

自分自身が海外の学術誌に投稿発表するのは異なる趣で、小生の整形外科医人生の中で非常に貴重な思い出に残る体験であり執筆でした。

日仏整形外科学会会員の多くは「私のフランス整形外科」を心に秘めておられることと思います。今回このような形でINFOSに取り上げて頂いた小林晶先生と金子和夫先生と大橋弘嗣先生をはじめ、多くの日仏整形外科学会会員の皆さんに感謝申し上げます。

## MAÎTRISE ORTHOPÉDIQUE

JANVIER 2017 - MENSUEL  
COMMISSION PARITAIRE 1218T 86410 ISSN : 1148 2362 N° 260

---

### RENCONTRE



**Chiaki Tanaka est chirurgien orthopédiste au Japon et chef de service à l'hôpital municipal de Kyoto. Son activité est surtout centrée sur la prothèse totale de hanche pour laquelle il a été formé en France par de prestigieux Maîtres. Il milite activement pour le développement de lien orthopédiques franco-japonais.**

**Q :** Qu'en avez-vous appris de la SICO ?

**R :** C'est une école de pensée, une école de pensée, une école de pensée... (text continues with interview content)

---

### NUMÉRIQUE

**ANALYSE DE LA FIABILITÉ DU LOGICIEL TRAUMACAD ET DE L'INFLUENCE DU CHIRURGIEN DANS LA PROGRAMMATION DES PROTHÈSES TOTALES DE HANCHE**

F. SAILHAN<sup>1,2</sup>, L. JACOB<sup>1</sup>, B. HACHACHE<sup>1</sup>, JM. POSTEL<sup>1,3</sup>, P. LAPRESLE<sup>1</sup>, L. KERBOULL<sup>1,4</sup>

1. Institut de Chirurgie de la Hanche et de Genou (IcHrG), Espace Médical Vauban, 21 Avenue de Sigat, 75007  
2. Clinique Arago, 187 rue Raymond Losserand 75014  
3. Hôpital Cochin, 27 rue du Faubourg Saint-Jacques, 75014  
4. dsailhan@gmail.com

**SOMMAIRE N° 260**

**R. ENCONTRE**  
1-3

**R. NUMÉRIQUE**  
4-9

**R. TECHNIQUE**  
10-19

**R. MISE AU POINT**  
20-21

**R. ACTUALITÉ**  
22-23

**R. AGENDA-ANNONCE**  
24-25

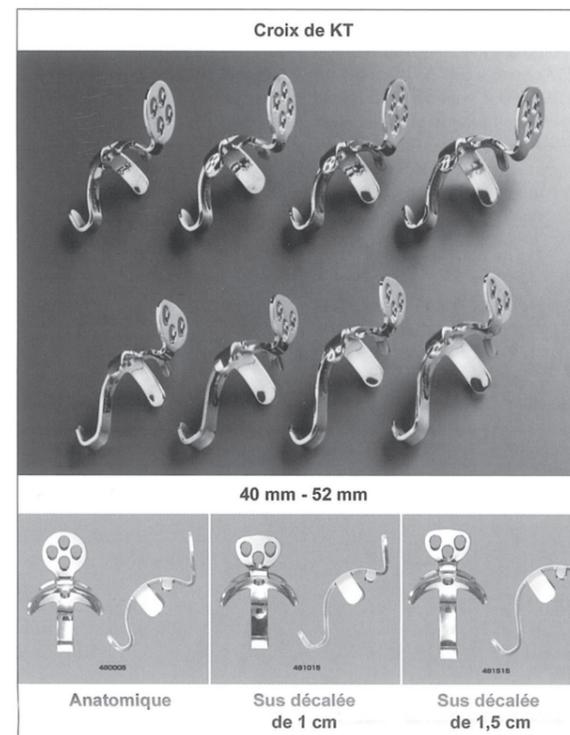


Figure 1.

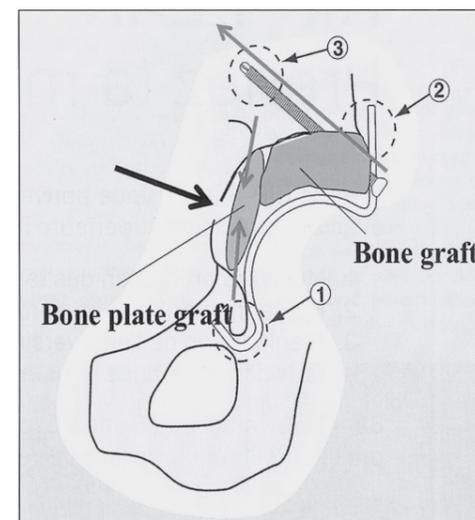


Figure 12 : La fixation de la vis distale permet de neutraliser la discontinuité pelvienne.

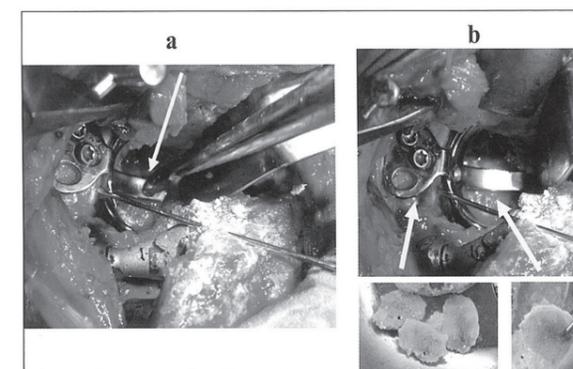


Figure 14 : Confirmation de la stabilité de l'armature.

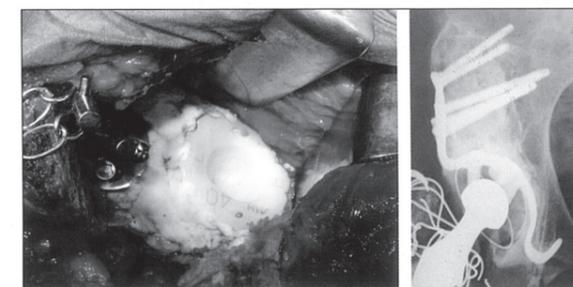


Figure 15 : Scellement de la cupule.

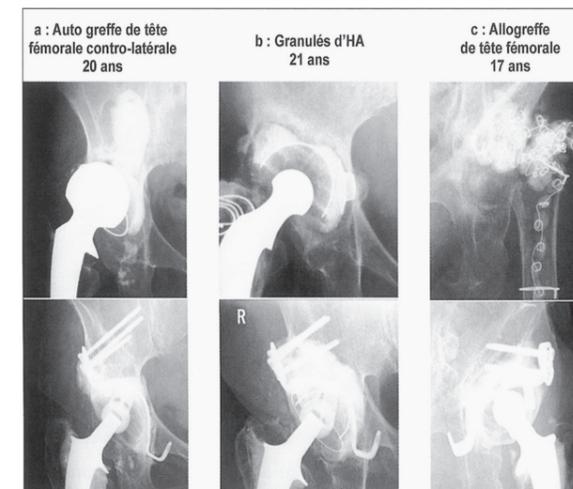


Figure 21 : Exemples de matériaux de reconstruction.

## 日本側・フランス側役員を紹介します

### 日本側役員

会長	金子 和夫	顧問	瀬本 喜啓
副会長	大橋 弘嗣	交換研究委員	水野 直子
書記長	藤原 憲太		西脇 徹
書記・会計	青木 清		金城 健
幹事	安永 裕司	交換研修外部委員	竹本 充
	久保 俊一		大槻 周平
	本間 康弘		藤城 高志
	今井 晋二		内藤 聖人
	飯田 哲		市原 理司
	田中 康仁		
	星 忠行		
名誉会員	小野村敏信		
	小林 晶		
	坂巻 豊教		

### フランス側役員

President	Philippe Hernigou (Paris)
Secrétaire General	Philippe Merloz (Grenoble)
Tresorier	Philippe Wicart (Paris)
Membre de Bureau	Philippe Liverneaux (Strasbourg)
	Alain Durandeu (Bordeaux)
	Jean Pierre Courpied (Paris)
	Jacques Caton (Lyon)
	Olivier Guyen (Lyon)



## 日仏整形外科学合同会議 (AFJO) 開催一覧

会期	開催地	議長
第1回 1990年11月12日	パリ	Régie C. Michel
第2回 1992年10月4日	京都	七川 歎次
第3回 1994年11月7日	パリ	Charles Picault
第4回 1996年4月13~14日	東京	菅野 卓郎
第5回 1998年9月17~19日	リヨン	Jean Pierre Courpied
第6回 2001年5月11~12日	大阪	小林 晶
第7回 2003年9月26~27日	グルノーブル	Philippe Merloz
第8回 2005年5月6~7日	京都	瀬本 喜啓
第9回 2007年9月14~15日	ニース	Jacques Caton
第10回 2009年5月28~30日	沖縄	大橋 弘嗣
第11回 2011年6月2~4日	ボルドー	Arain Durandeu
第12回 2013年5月30日~6月1日	京都	飯田 寛和、田中 千晶
第13回 2015年6月4日~6日	サン・マロ	Philippe Hernigou
第14回 2017年5月12日~13日	日光	高橋 和久、老沼 和弘
第15回	リヨン(予定)	Luc Kerboull

## 日仏整形外科学会 (SOFJO) 開催一覧

会期	開催地	会長
第1回 1987年11月6日	神戸	七川 歎次
第2回 1988年10月29日	東京	七川 歎次
第3回 1989年11月11日	大阪	七川 歎次
第4回 1991年11月9日	大阪	七川 歎次
第5回 1993年10月30日	大阪	七川 歎次
第6回 1995年5月10日	大阪	七川 歎次
第7回 1997年11月1日	大阪	七川 歎次
第8回 1999年10月16日	大阪	山野 慶樹
第9回 2000年11月25日	横浜	坂巻 豊教
第10回 2002年10月12日	弘前	原田 征行
第11回 2004年11月6日	神戸	小野村敏信
第12回 2006年10月14日	京都	久保 俊一
第13回 2008年9月27日	東京	金子 和夫
第14回 2010年9月25日	広島	安永 裕司
第15回 2012年9月22日	東京	飯田 哲
第16回 2014年9月6日	福岡	塩田 悦仁
第17回 2016年11月25日~26日	岡山・直島	藤原 憲太、青木 清
第18回 2018年7月7日	大津	今井 晋二
第19回 2020年6月20日~21日	札幌	星 忠行

あなたも  
フランス研修に!

日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFECOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。来年度の研修条件、応募条件等は下記のとおりです。詳しくは下記のとおりです。

本交換研修プログラムの趣旨は、フランスとのコネクションを持たない青年医師に留学先を紹介し、渡航費用と滞在費の一部を援助するというものです。したがって、一度フランス留学を経験していただける先生は応募をご遠慮ください。

募 集 要 項

1) 募集人員	若干名（2020年度）
2) 研修条件	<p>1. 滞在期間は3か月間を原則とする。 この間はビザが不要であるが、これを越して滞在する場合の延長に関するすべての手続き（語学学校入学手続きやビザ発給のための受け入れ承諾書の依頼等）は自分ですること。 1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である。 7月、8月はフランスのパカンスシーズンになるので避ける方が望ましい。</p> <p>2. フランスでの滞施設は、希望する研修分野等に応じてフランス側の担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。</p> <p>3. 費用について a) 渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。 b) フランス滞在中の滞在費、食費および移動などの費用は原則として自己負担とする。</p> <p>4. 帰国後、仏語（英語でも可）と日本語での報告書の提出ならびに本会の総会での帰朝報告を行う。</p> <p>5. 本年度の研修開始時期は4月以降とする。</p>
3) 応募条件	<p>1. 応募者は日仏整形外科学会会員であること。 2. 応募者は日本整形外科学会専門医であること。 3. 原則として40才を応募年齢の上限とする。 4. 勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。 5. フランス語または英語を話すもの。</p>
4) 応募に必要な書類	<p>1. 日仏整形外科学会交換研修申請書（TXT、PDFをダウンロード・毎年様式が変わるので、注意する事） 2. 履歴書（大学卒業以降とする） 3. 応募の動機や抱負についての小論文 4. 日仏整形外科学会会員1名の推薦状—推薦者は身元保証人に準ずる者と考えること。 5. 業績目録—主な発表論文5編以内（論文の別刷りは不要） 6. 渡仏承諾書 a) 大学の医局勤務者………教授の承諾書 b) 病院または施設勤務者………勤務している病院または施設の責任者の承諾書 (大学の医局人事により出張中の者は、教授の承諾書も要す。) 以上1. 以外の書式は自由であるが、すべてA4サイズに統一し、上記の順にならべて左上をホチキスで綴じること。また、コピーを23部を同封すること。</p>
5) 選考方法	<p>1. 第1次審査は書類選考とする。書類審査の結果は2019年8月上旬に個別に連絡する。 2. 書類選考に合格したのものには2019年9月下旬に大阪府済生会中津病院において面接を行う予定である。面接の時間は個別に通知する。 3. 合否は2019年10月中旬に通知する。 4. 合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。</p>
6) 申請締め切り	2019年7月31日必着
7) 申し込み先	<p>日仏整形外科学会事務局 大阪府済生会中津病院整形外科内 〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39 大阪府済生会中津病院整形外科 Tel(06)6372-0333 Fax(06)6372-0339</p> <p style="text-align: right;">日仏整形外科学会 係 大橋 弘嗣</p>

フランス人研修医  
受け入れのお願い

本年度も日仏整形外科学会とフランス整形外科学会（SOFECOT）との間で、青年整形外科医の交換研修を実施いたします。

受け入れ期間は原則として3ヶ月間ですが、1ヶ月でも2ヶ月でも結構ですので、是非会員の先生方のおられる施設で、フランス人整形外科医の研修を受け入れて頂きたくお願い申し上げます。

来日するフランス人医師は、英語を話す事が条件になっております。また日仏間の旅費はSOFECOTが支給し、日本での滞在費（宿泊費・旅費）は、日本側（原則として受け入れ施設が）負担することになっております。受け入れを承諾していただける場合は、受け入れ承諾書に滞在条件等をご記入いただき、係までご送付ください。

日仏整形外科学会 会長 金子 和夫  
日仏整形外科学会 交換研修係 金子 和夫  
連絡先：大阪府済生会中津病院整形外科

〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39  
TEL 06-6372-0333（お問い合わせは大橋弘嗣まで）  
LU7H-00HS@asahi-net.or.jp



# 第15回日仏整形外科合同会議 開催のご案内

(15ème R'union de l'Association France-Japon d'Orthopédie, AFJO)

第15回日仏整形外科合同会議の開催について、他の学会との兼ね合い等の事情から現在のところ2019年9月にLyonでの開催ということになりそうです。学会まで6か月となっていますので、正確な会期、場所などについてできるだけ早く情報を知らせていただけるようにフランス側と連絡をとっています。おそらくこの広報誌が届くころにはいろいろなことが決まってきていると思われます。お手数ですが、逐次学会ホームページをご覧ください。

【開催地】リヨン(仮)

【会長】Luc Kerboull (Paris)

## (リヨンの紹介)

リヨンはフランス南東部に位置するパリに次ぐ第2の都市です。ローヌ川とソーヌ川が流れ、美しい旧市街は世界遺産に指定されています。食通の街としても知られており、街中のレストランの質は高く、また郊外には「ポール・ボキューズ」などの超有名店が点在しています。TGVがパリ市内だけではなくシャルルドゴール空港との間も繋いでいますので、日本からのアクセスも良好です。



# 第19回日仏整形外科学会 開催のご案内

(19ème Réunion de la Société Franco-Japonaise d'Orthopédie)

## 【第19回日仏整形外科学会 (SOFJO) の開催にあたってのご挨拶】

この度、第19回日仏整形外科学会 (SOFJO) を2020年6月20日(土)21日(日)の両日、札幌市の札幌コンベンションセンターで開催させていただくことになりました。

1987年に創設された歴史ある本学会を担当させていただき、大変名誉なことと存じております。今回は、同門の石橋恭之弘前大学教授の主催するJOSKAS(日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会)& JOSSM(日本整形外科スポーツ医学会)combined meeting との同時開催となります。

弘前大学と本学会との関わりは深く、2002年には故原田征行教授が青森市で第10回SOFJOを開催され、また本学会の日仏交換研修プログラムによりこれまで私を含め弘前大学整形外科学教室員3名にフランス留学の機会をいただいております。私自身微力ではありますが、弘前大学整形外科学教室と同門会の協力のもとに、実りある会になりますように鋭意努力して参る所存でございます。

今回の学会は整形外科の科学的な議論のみならず、日仏友好交流を文化的にも促進できればとの希望を込めて、“Passerelle Culturelle et Scientifique”(文化と科学の架け橋)をテーマとさせていただきました。また、開催時期が同年8月の東京オリンピックの開催を間近に控える6月で、日本中が活気づいているものと予想されます。世界中の人々の注目が日本に集まるこの時期に日仏両国の整形外科医の交流ができることは意義深いものがあると思います。

講演予定としましては、フランス側から、LyonのPhilippe Neyret先生(膝関節)、BordeauxのIbrahim Obeid先生(脊椎)、ToursのLuc Favard先生(肩関節)に、日本側から、小林晶先生(福岡整形外科病院 顧問)をお願いしております。さらに、パネルディスカッションとして膝蓋骨脱臼をテーマに準備を進めております。これらに加え、通常の一般演題と、恒例の日仏交換研修帰朝報告を予定しております。したがって、近年の演題数の増加と、私の1会場での開催希望をいれていただき、1.5日間を予定させていただきました。

異常気象がささやかれる昨今であります。初夏の札幌の涼しさの中で、フランス整形外科の香りが漂う本学会への多数の皆様のご参加を心からお待ちしております。

小松整形外科医院 星 忠行

## 【主催事務局】

弘前大学大学院医学研究科整形外科学講座

〒036-8562 青森県弘前市在府町5 TEL. 0172-39-5083 FAX. 0172-36-3826

## 小松整形外科医院

〒312-0032 茨城県ひたちなか市津田3245-1 TEL. 029-275-4141 FAX. 029-275-3452

E-mail:sofjo2020@komatsu-seikei.jp

1



### 仏日・日仏整形外科学用語集

仏日整形外科用語集は森崎直木先生が編集を行われ、1989年に第1版が文光堂から出版されました。その後、1991年に改訂版が出版されましたが、森崎直木先生が亡くなられて以降、改訂されることなく現在に至りました。フランスの整形外科を知るためにはどうしてもフランス語の論文を読む必要がありますので、森崎先生の仏日整形外科用語集は非常に有用な辞書でした。しかし、医学の進歩に用語集も追いついて行く必要があると考え、日仏整形外科学会が中心となってその後の時代に应运じて出現した新語を大幅に追加して新しい用語集の編集を行なってまいりました。最終的には単語数は仏日がおおよそ7000語、日仏はおおよそ6200語となりました。編集にあたりましては、日本整形外科学会学術用語委員会から綿密な指導をいただき、また最後には診断と治療社編集部のみなさんの度重なる校正を受けて2013年5月に出版の暁となりました。

購入希望がありましたら事務局までご連絡下さい。診断と治療社のホームページからでも購入していただけます。また、会員の方は学会ホームページからダウンロードもできます。是非ご活用下さい。

2



日仏整形外科学会のインターネットホームページのアドレスは

<http://www.sofjo.gr.jp/>

です。  
是非のぞいてみてください。

- ・新着/NEWS
- ・沿革
- ・活動内容
  - 入会のご案内
- ・役員紹介
- ・共同研究
- ・交換研修
  - 交換研修帰朝報告
- ・会誌INFOS
- ・仏日・日仏整形外科用語集
- ・日仏整形外科協議会 (AFJO)
- ・AFJO (English)
- ・関連リンク集

3

#### 平成29年度会計報告

歳入の部	(単位：円)
会員年会費	1,877,000
用語集販売	0
企業寄附	270,000
第14回日仏整形外科合同会議より寄附	500,000
広告料	330,000
預金利息	12
前年度繰越金	1,800,932
計	4,777,944

#### 平成30年度事業費予算編成

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費	1,528,000
用語集販売	3,600
企業寄附	500,000
会員寄附	0
広告料	500,000
預金利息	3
前年度繰越金	2,913,623
計	5,445,226

#### 歳出の部 (単位：円)

日本人交換整形外科医奨学金 (2名)	200,000
渡航費+滞在費(一部)	
フランス人交換整形外科医奨学金 0名	0
SOFJO/AFJO開催関係費	0
日仏整形外科学会関連事業(表彰など)	0
日仏共同研究、研究助成金	0
インターネットホームページ維持管理費	314,019
日仏整形外科学会事務局費	
通信費	104,042
事務費	4,913
アルバイト代	232,000
会議費	32,622
旅費・交通費	359,527
印刷費	605,902
雑費	11,296
出金小計	1,864,321
次年度繰越金	2,913,623
計	4,777,944

#### 歳出の部 (単位：円)

日本人交換整形外科医奨学金	400,000
渡航費+滞在費(一部) 100,000×4名	
フランス人交換整形外科医奨学金	200,000
滞在費(2ヶ月)+交通費 100,000×2名	
SOFJO/AFJO開催関係費	1,000,000
日仏整形外科学会関連事業(表彰など)	20,000
日仏共同研究、研究助成	200,000
インターネットホームページ維持管理費	350,000
日仏整形外科学会事務局費	
通信費	120,000
事務費	30,000
アルバイト代	300,000
会議費	35,000
旅費・交通費	360,000
印刷費	650,000
予備費	30,000
出金小計	3,695,000
次年度繰越金	1,750,226
計	5,445,226

## 4

### これまでに交換研修に参加された先生方

年度	氏名	所属
1990	稲毛 昭彦	大阪医科大学
1991	三輪 隆	帝京大学
1991	末松 典明	旭川医科大学
1992	星 忠行	弘前大学
1992	村上 元庸	滋賀医科大学
1992	久保 俊一	京都府立医科大学
1993	小浦 宏	岡山大学
1994	西川 真史	弘前大学
1994	岩崎 幹季	大阪大学
1995	石澤 命仁	滋賀医科大学
1995	安永 裕司	広島大学
1996	安間 基雄	順天堂大学
1996	寺門 淳	千葉大学
1996	仁平高太郎	慶応義塾大学
1997	益田 和明	岐阜大学
1997	金子 和生	山口大学
1998	山川 徹	三重大学
1998	岡本 雅雄	大阪医科大学
1999	清重 佳郎	山形医科大学
1999	川崎 拓	滋賀医科大学
2000	宮本 敬	岐阜大学
2000	藤井 一晃	弘前大学
2000	細野 昇	大阪大学
2001	鳥飼 英久	千葉大学
2001	久我 尚之	九州大学
2002	瀧川 直秀	大阪医科大学
2002	松峯 昭彦	三重大学
2003	柘原 俊久	昭和大学藤が丘病院
2003	矢吹 有里	慶応義塾大学
2004	和田 孝彦	関西医科大学
2004	久留 隆史	広島大学
2004	小山内俊久	山形大学
2005	小田 幸作	高槻赤十字病院
2005	松尾 篤	九州大学
2006	小室 元	阪和住吉総合病院
2006	城戸 顕	奈良県立医科大学
2006	早稲田明生	国際親善総合病院
2007	益田 宗彰	総合せき損センター
2007	黒住 健人	高知医療センター
2007	菊池 克久	滋賀医科大学整形外科
2008	上島圭一郎	京都府立医科大学
2008	水野 直子	行岡病院
2008	金澤 博明	順天堂浦安病院
2008	渡辺 千聡	大阪医科大学
2009	浅田 卓	関西医科大学
2009	山本りさこ	広島大学
2010	塚本理一郎	湘南鎌倉人工関節センター
2010	奥村 法昭	滋賀医科大学
2011	久保田光昭	順天堂大学
2011	西脇 徹	慶応義塾大学

## 5

### これまでにフランスから交換研修医として来られた先生方と研修施設

年度	氏名	研修病院名
1991	Philippe LIVERNEAUX	京都府立医科大学・広島大学
1991	Luis Michel COLLET	大阪医科大学・滋賀小児センター・福岡こども病院
1992	Frederic DUBRANA	福岡整形外科病院・九州大学
1992	Marc CHASSARD	慶応義塾大学・東海大学・札幌医科大学
1994	Philippe WICART	山口大学・金沢大学
1994	Philippe RENAUX	滋賀医科大学・岡山大学
1995	Michel NINOU	大阪医科大学・新潟手の外科研究所・広島大学
1997	Bernardo Vargas BARRETO	国立小児病院・岡山大学・国立大阪病院
1997	Sylvie MERCIER	大阪医科大学
1998	Jérôme COTTALORDA	大阪医科大学・福岡県立粕屋新光園
1999	Olivier CHARROIS	滋賀医科大学・京都市立病院
1999	Eric HAVET	滋賀医科大学
2000	Olivier CHARROIS	京都市立病院
2001	Laurent JACQUOT	福岡整形外科病院・慶応義塾大学・高岡整志会病院
2001	Alexandre ROCHWERGER	大阪医科大学・山形大学
2004	Brice ILHARRBORDE	総合せき損センター・大阪市立大学
2007	Damien BREITEL	総合せき損センター・奈良県立医科大学
2007	Sybille FACCA	弘前大学・山形大学・京都府立医科大学・広島大学
2008	Thomas APARD	山形大学・大阪府立母子保健総合医療センター
2009	François LINTZ	京都市立大学
2011	斉藤 朝海	東京女子医大膠原病リウマチ痛風センター
2011	金城 健	沖縄県立南部医療センター
2012	齋藤 正純	京都府立医科大学
2012	成尾 宗浩	東名厚木病院
2012	渡辺 新	高萩協同病院
2012	小池 洋一	仙台赤十字病院
2012	長谷川浩士	公立置賜総合病院
2013	野口 森幸	仙台赤十字病院
2013	相川 淳	北里大学
2013	高澤 誠	千葉大学
2013	市原 理司	順天堂浦安病院
2013	百村 励	順天堂大学
2013	二村 昭元	東京医科歯科大学
2013	越智 健介	東京女子医大膠原病リウマチ痛風センター
2013	吉田 雅人	名古屋市立大学
2013	竹本 充	京都大学
2013	田村 太質	大阪府立母子保健総合医療センター
2014	江口 和	下志津病院
2014	深沢 克康	関東労災病院
2014	児玉 成人	滋賀医科大学
2014	荒瀧 慎也	岡山大学
2014	大槻 周平	大阪医科大学
2015	菊池 克彦	千早病院
2015	木島 泰明	秋田大学
2015	木田 圭重	京都府立医科大学
2016	藤城 高志	大阪医科大学
2016	岩田 浩志	あい小児病院医療センター
2017	蒲生 和重	ベルランド総合病院
2017	岡本 純典	大阪医科大学
2018	迫間 巧将	尾道市立市民病院
2018	入村 早苗	東京都保健医療公社大久保病院
2018	林 和 憲	大阪市立大学
2018	折田 純久	千葉大学
2018	田中 秀達	仙台赤十字病院
2018	井下田有芳	順天堂大学
2018	内田 勲	栃木医療センター
2018	田邊 智絵	昭和大学江東豊洲病院
2018	新谷 康介	大阪市立大学
2019	田中 秀達	仙台赤十字病院
2019	金澤 憲治	みやぎ県南中核病院
2019	岡崎 良紀	岡山大学
2019	平川 義弘	大阪市立大学
2019	岩井智守男	岐阜大学
2019	木澤 桃子	大阪医科大学
2019	前田 勉	滋賀医科大学

## 6

寄附金を頂戴いたしました。  
ご協力ありがとうございました。

第18回日仏整形外科学会

第14回日仏整形外科学会合同会議

ビーブラウン・エースクラブ株式会社

ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社

株式会社松本医科

松本アンプリチュード株式会社

有限会社永野義肢

### 編集後記

2018年の漢字は「災」でした。日本全国で様々な自然災害に見舞われました。今井晋二先生が主催されました第18回SOFJOは、あいにくの大雨にもかかわらずたくさんの先生にご参加いただき盛会に終わりました。また、本学会事務局のある大阪では6月に大阪北部地震、9月に台風21号の被害を受け、災害対策の必要性を再認識しました。一方、フランスではデモや銃乱射など不安定な情勢となっており、留学された先生方も不安を感じられたことと思います。2019年はフランスにとりまして、日本にとりまして良いことの多い年になればと願っています。

このような中、交換研修にはたくさんの先生方から応募をいただき、うれしく思っています。本号では7人の先生から帰朝報告をいただきました。フランス語という言葉の壁があるにもかかわらず皆さん積極的に研修されておられ、頼もしく読ませていただきました。

Maitrise Orthopédique No.260に田中千晶先生の記事が掲載されました。全文を載せることはできませんでしたが、一部はインターネットで見ることができますので是非ご覧ください。

次回のAFJOはリヨンで開催される予定になりました。当初はストラスブールでの開催予定で準備が進められていましたが、フランス側の事情で変更される見込みです。新しい情報が入り次第、ホームページに掲載いたしますので、時々ホームページをチェックしていただければと思います。ご不便をおかけしますが、よろしくお願いたします。

(大橋弘嗣)



hvc  
human health care

## 患者様の想いを見つめて、 薬は生まれる。

顕微鏡を覗く日も、薬をお届けする日も、見つめています。  
病気とたたかう人の、言葉にできない痛みや不安。生きることへの希望。  
私たちは、医師のように普段からお会いすることはできませんが、  
そのぶん、患者様の想いにまっすぐ向き合っていたいと思います。  
治療を続けるその人を、勇気づける存在であるために。  
病気を見つめるだけでなく、想いを見つめて、薬は生まれる。  
「ヒューマン・ヘルスケア」。それが、私たちの原点です。

ヒューマン・ヘルスケア企業 エーザイ



AFUTURE FOR LIFE  
Eisai  
エーザイはWHOのリンパ系フィラリア病制圧活動を支援しています。

THE NEW VALUE FRONTIER



# Aquala®

## 見えない革新。

ポリエチレンの特性はそのままに、摺動面を低摩耗化した技術。  
それは、人工股関節における「見えない革新。」  
日本発、人工関節の未来を変える“革新”を目指して。

[www.aquala.jp](http://www.aquala.jp)

J-Taper ステム 【医療機器承認番号：22300BZX00472000】  
SORUM TT シェル 【医療機器承認番号：22500BZX00329000】  
Aquala ライナー 【医療機器承認番号：22300BZX00234000】

Aquala は京セラ株式会社の登録商標です。

### 京セラ株式会社 メディカル事業部

本 社 京都市伏見区竹田鳥羽殿町6番地 〒612-8501 Tel.075-778-1980  
東京事業所 東京都品川区東品川3丁目32-42 I・Sビル 〒140-8810 Tel.03-5782-7006

札幌営業所 Tel:011-280-6020 Fax:011-281-6525 大阪営業所 Tel:06-6350-1017 Fax:06-6350-8157  
東北営業所 Tel:022-216-5176 Fax:022-216-7116 岡山営業所 Tel:086-803-3620 Fax:086-225-2289  
大宮第2営業所 Tel:048-640-7779 Fax:048-641-5828 広島営業所 Tel:082-212-1003 Fax:082-211-3008  
名古屋営業所 Tel:052-930-1481 Fax:052-938-1377 九州営業所 Tel:092-452-8140 Fax:092-452-8177

<http://www.kyocera.co.jp/prdct/medical/index.html>

© 2017 KYOCERA Corporation



<http://kansetsu-itai.com/>



# CORAIL® HIP SYSTEM

The science of simplicity



製造販売元  
 ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社  
 デピューシンセス・ジャパン  
 トラウマ & ジョイント リコンストラクション事業部  
 〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号  
 T. 03 4411 6073 F. 03 4411 5053  
 depuysynthes.jp

販売名: Corail AMT システム  
 承認番号: 224008ZX00015000  
 販売名: BIOLOX delta セラミックヘッド (CERAMAX)  
 承認番号: 222008ZX00971000  
 販売名: ピナクル マラソンポリライナー  
 承認番号: 221008ZX01026000  
 販売名: ピナクル Porocoat  
 承認番号: 222008ZX00779000

**CORAIL®**  
 HIP SYSTEM

©J&JK2015・DSJE014-01-201506

## GS CUP Geodesic Structure CUP



## BLEND-E® XL



## プリザーブシステム Preserve



製造販売業者

**帝人ナカシマメディカル株式会社**

〒709-0625 岡山市東区上道北方688-1  
 TEL. 086-279-6278 FAX. 086-279-9510

GSカップ 医療機器製造販売承認番号: 226008ZX00463000  
 ブレンド-E XL THAライナー 医療機器製造販売承認番号: 225008ZX00125000  
 ブレンド-E XL バイポーラカップ 医療機器製造販売承認番号: 225008ZX00128000  
 プリザーブ システム 医療機器製造販売承認番号: 226008ZX00371000



## 粘着力が良好な、腰痛症\*の鎮痛・消炎に効果を有するパップ剤

\*腰痛症(筋・筋性腰痛症、変形性脊椎症、椎間板症、腰椎捻挫)

経皮鎮痛消炎剤

【薬価基準収載】

**モーラス®パップXR120mg**

MOHRUS.PAP XR120mg

ケトプロフェン2%

【薬価基準収載】

**モーラス®パップXR240mg**

MOHRUS.PAP XR240mg

ケトプロフェン2%

### 【禁忌】(次の患者には使用しないこと)

- 1) 本剤又は本剤の成分に対して過敏症の既往歴のある患者(「重要な基本的注意」の項(1)参照)
- 2) アスピリン喘息(非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発)又はその既往歴のある患者[喘息発作を誘発するおそれがある。]
- 3) チアプロフェン酸、スプロフェン、フェノフィブラート並びにオキシベンゾン及びオクトクリレンを含有する製品(サンスクリーン、香水等)に対して過敏症の既往歴のある患者[これらの成分に対して過敏症の既往歴のある患者では、本剤に対しても過敏症を示すおそれがある。]
- 4) 光線過敏症の既往歴のある患者[光線過敏症を誘発するおそれがある。]
- 5) 妊娠後期の女性

### 【効能・効果】

- 下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎
  - 腰痛症(筋・筋性腰痛症、変形性脊椎症、椎間板症、腰椎捻挫)、変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎(テニス肘等)、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛
  - 関節リウマチにおける関節局所の鎮痛

### 【効能・効果に関連する使用上の注意】

- 1) 本剤の使用により重篤な接触皮膚炎、光線過敏症が発現することがあり、中には重度の全身性発疹に進展する例が報告されているので、疾病の治療上の必要性を十分に検討の上、治療上の有益性が危険性を上回る場合にのみ使用すること。
- 2) 損傷皮膚には本剤を使用しないこと。

### 【用法・用量】

1日1回患部に貼付する。

### 【使用上の注意】

1. 慎重投与(次の患者には慎重に使用すること)
  - 気管支喘息のある患者[アスピリン喘息患者が潜在しているおそれがある。](「重大な副作用」の項(2)参照)
2. 重要な基本的注意
  - 1) 本剤又は本剤の成分により過敏症(紅斑、発疹・発赤、腫脹、刺激感、痒疹等を含む)を発現したことがある患者には使用しないこと。
  - 2) 接触皮膚炎又は光線過敏症を発現することがあり、中には重度の全身性発疹に至った症例も報告されているので、使用前に患者に対し次の指導を十分に行うこと。(「重大な副作用」の項(3)(4)参照)
    - 1) 紫外線曝露の有無にかかわらず、接触皮膚炎を発現することがあるので、発疹・発赤、痒疹感、刺激感等の皮膚症状が認められた場合には、直ちに使用を中止し、患部を遮光し、受診すること。なお、使用後数日を経過して発現する場合があるので、同様に注意すること。

- 2) 光線過敏症を発現することがあるので、使用中は天候にかかわらず、戸外の活動を避けるとともに、日常の外出時も、本剤貼付部を衣服、サポーター等で遮光すること。なお、白い生地や薄手の服は紫外線を透過させるおそれがあるので、紫外線を透過させにくい色の衣服などを着用すること。また、使用後数日から数カ月を経過して発現することもあるので、使用後も当分の間、同様に注意すること。異常が認められた場合には直ちに本剤の使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。
- 3) 皮膚の感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染を伴う炎症に対して用いる場合には適切な抗菌剤又は抗真菌剤を併用し、観察を十分に行い慎重に使用すること。
- 4) 腰痛症、変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛に本剤を使用する場合は、以下の点に注意すること。
  - 1) 本剤による治療は対症療法であるので、症状に応じて薬物療法以外の療法も考慮すること。また、投与が長期にわたる場合には患者の状態を十分に観察し、副作用の発現に留意すること。
- 5) 関節リウマチにおける関節局所の鎮痛に本剤を使用する場合は、以下の点に注意すること。
  - 1) 関節リウマチに対する本剤による治療は対症療法であるので、抗リウマチ薬等による適切な治療が行われ、なお関節に痛みが残る患者のみに使用すること。
  - 2) 関節痛の状態を観察しながら使用し、長期にわたり漫然と連用しないこと。また、必要最小限の回数にとどめること。

### 3. 相互作用

【併用注意】(併用に注意すること)

メトレキサート

### 4. 副作用

本剤は、副作用発現頻度が明確となる臨床試験を実施していない。なお、ケトプロフェン20mg含有テープ剤の各承認時までに報告された副作用は次のとおりである。

○腰痛症、変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛

総症例1156例中副作用が報告されたのは57例(4.93%)であり、発現した副作用は、発疹11件、発赤9件、痒疹感18件、刺激感5件等の接触皮膚炎54件(4.67%)、貼付部の膨疹、動悸、顔面及び手の浮腫各1件(0.09%)などであった。(モーラステープ承認時)

○関節リウマチ

総症例525例中副作用が報告されたのは45例(8.57%)であり、発現した副作用は、接触性皮膚炎17件、適用部位痒疹感12件、適用部位紅斑6件、適用部位発疹6件、適用部位皮膚炎3件等であった。(モーラステープ20mg効能追加承認時)

ほかに医師などの自発的報告により、ショック、アナフィラキシー、喘息発作の誘発(アスピリン喘息)、光線過敏症の発現が報告されている。

### (1) 重大な副作用

1) **ショック**(頻度不明)、**アナフィラキシー**(0.1%未満)  
ショック、アナフィラキシー(蕁麻疹、呼吸困難、顔面浮腫等)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には使用を中止し、適切な処置を行うこと。

2) **喘息発作の誘発(アスピリン喘息)**(0.1%未満)  
喘息発作を誘発することがあるので、乾性ラ音、喘鳴、呼吸困難等の初期症状が発現した場合は使用を中止すること。気管支喘息患者の中には約10%のアスピリン喘息患者が潜在していると考えられているので留意すること。なお、本剤による喘息発作の誘発は、貼付後数時間で発現している。(【禁忌】の項(2)参照)

3) **接触皮膚炎**(5%未満、重篤例は頻度不明)  
本剤貼付部に発現した痒疹感、刺激感、紅斑、発疹・発赤等が悪化し、腫脹、浮腫、水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着、色素脱失が発現し、さらに**全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化**することがあるので、異常が認められた場合には直ちに使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。なお、使用後数日を経過してから発現することもある。

4) **光線過敏症**(頻度不明)  
本剤の貼付部を紫外線に曝露することにより、強い痒疹を伴う紅斑、発疹、刺激感、腫脹、浮腫、水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着、色素脱失が発現し、さらに**全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化**することがあるので、異常が認められた場合には直ちに使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。なお、使用後数日を経過してから発現することもある。

●その他の使用上の注意については添付文書をご参照ください。  
●添付文書の改訂に十分ご留意ください。

## Lyon Hip System

### tige fémorale à cimenter lisse

リオン・ヒップ システム  
セメントステム



## GALAXY THA Acetabular Cup

ギャラクシー  
THA寛骨白カップ



## eSPHERIC BIPOLAR CUP SYSTEM

イー・スフェリック  
バイポーラーカップ  
システム



■ 販売業者(資料請求先)

株式会社松本医科器械の  
グループ会社



Motion for the Active life

松本アンプリチュード株式会社

〒113-0034 東京都文京区湯島4-1-11 南山堂ビル  
TEL.03-3868-0711 FAX.03-3868-0722  
URL:http://www.matsumotomed.jp  
URL:http://www.amplitude-ortho.com/

製造販売元 **久光製薬株式会社**

〒841-0017 鳥栖市田代大官町408番地

資料請求先: 学術部 お客様相談室 〒100-6330 東京都千代田区丸の内二丁目4番1号

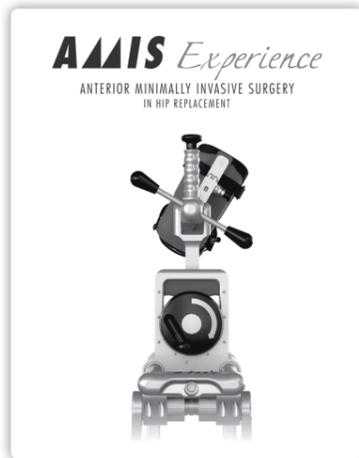
フリーダイヤル 0120-381332 FAX. (03) 5293-1723

受付時間/9:00-17:50(土日・祝日・会社休日を除く)

2017年2月作成

Medacta Internationalはスイスに本社を置く、整形及び脳外科インプラントの開発・製造・販売を行っているグローバルカンパニーです。Medactaは患者の生活の質を高めることをビジョンとして掲げております。

イノベーション、教育訓練の場を提供します。



製造販売業者  
**メダクタジャパン株式会社**  
 東京都千代田区麹町3-7-4 秩父屋ビル  
 TEL: 03-6272-8797 FAX:03-6272-8798

承認番号:22600BZX00321000  
 販売名:G M K S P H E R E 人工膝関節システム  
 承認番号:22500BZX00227000  
 販売名:G M K セメント付人工膝関節システム  
 承認番号:22800BZX00254000  
 販売名:MySpine PSガイド

届出番号:13B1X10060H01001  
 販売名:AMIS モバイル レッグポジショナー  
 承認番号:22400BZX00470000  
 販売名:M.U.S.T. スパイナルシステム

まだないくすりを  
 創るしごと。

世界には、まだ治せない病気があります。

世界には、まだ治せない病気とたたかう人たちがいます。

明日を変える一錠を創る。

アステラスの、しごとです。

明日は変えられる。



[www.astellas.com/jp/](http://www.astellas.com/jp/)